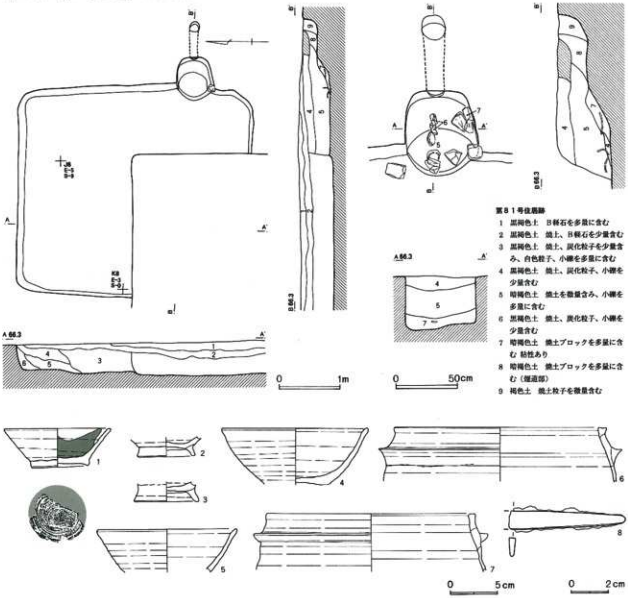
第164図　第81号住居跡・出土遺物



第134表　第81号住居跡出土遺物観察表

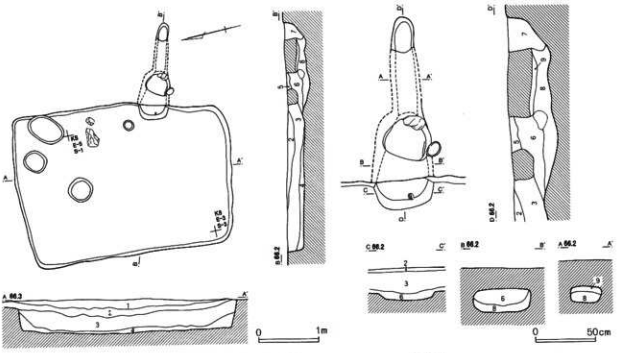
番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪幅	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	NS	11.0	4.2		5.7	B, E, I	良好	R	灰白	60	
2	高台付椀	NS				5.8	E, H	良好	R	黒	25	
3	高台付椀	HS				6.6	B, E, H	良好	R	浅黄橙	50	
4	高台付椀	NS	15.2				B, C, H	良好	R	灰白	70	
5	高台付椀	NS	14.6				B, D, H	良好	R	灰	20	カマド
6	羽AⅠb ロ	HS	22.2		2.4		A, B, D, E	良好		淡橙	15	カマド
7	羽BⅡa	NS	21.8		2.3		D, E, H, I	良好		灰白	20	カマド

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第81号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第82号住居跡（第165図）

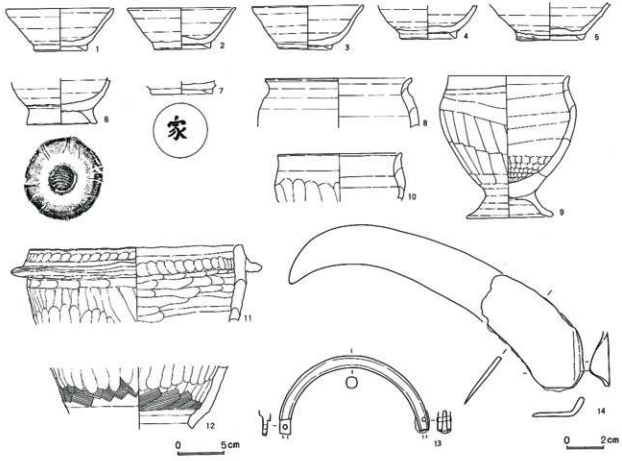
J・K－8グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙など激しく重複し、確認に手間取った。

第165図　第82号住居跡・出土遺物



第82号住居跡

1　黒褐色土　B軽石を多量に含む
2　黒褐色土　焼土、B軽石を少量含む
3　暗褐色土　焼土、炭化粒子を少量含む
4　黒褐色土　焼土、炭化粒子を少量含む
5　暗褐色土　焼土、炭化粒子、小礫を少量含む
6　黒褐色土　焼土、炭化粒子を少量含む　粘性あり
7　暗黄褐色土　焼土、炭化物を少量含み、小砂利を多量に含む　砂質
8　暗黄褐色土　焼土を微量含み、炭化物を少量含む　粘性あり
9　暗赤褐色土　焼土ブロック主体　粘性あり（天井部）



第135表　第82号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	機種	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	NS	11.5	4.5		5.2	B, E, I	良好	R	灰黄	50	
2	高台付椀	HS	11.6	4.4		5.8	B, E, I	良好	R	橙	95	
3	高台付椀	HS	11.9	4.2		5.4	B, E, I	普通	R	にぶい黄褐	75	
4	高台付椀	NS				5.1	B, E, I	普通	R	褐灰	30	
5	高台付椀	HS				6.7	B, E, I	良好	R	灰白	40	
6	高台付椀	HS				7.3	B, E, I	普通	R	褐灰	20	
7	高台付椀	HS				6.4	B, E, H, K	良好		灰白	100	墨書「家」
8	甕Ⅱ	HS	16.4				B, D, E	良好		明褐	15	
9	台付甕	H	12.8	15.0		9.0	B, C, D, E, H	良好		外－浅黄橙。内－黒。台部、黒	70	カマド
10	台付甕	H	13.2				B, E, H	良好		外－明褐。内－黒	20	
11	土師羽釜B	H	23.0			2.4	B, E, G	良好		外－明赤褐。内－明褐	25	カマド
12	土師甑	H					B, E	良好		明赤褐	20	

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.49m・短辺2.35m・深さ0.29mであった。住居跡の北東隅に径0.5mの浅い土壙を三基検出した。

主軸方位は、N－110°－Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、検出できなかったが、燃焼部の大半が、住居跡内に造られていた。燃焼部の左側に、径0.17mの小穴一基を検出した。煙道部は、長さ1.27mと細長く、地山掘り抜いて造られていた。住居跡の内側半分は、やや幅広かった。煙道部の細くなる部分には、扁平な川原石が構築材として使用されていた。煙道部の底面は、凹凸があり、燃焼部よりやや低く掘り込まれていた。煙り出し部は、一旦斜めに緩く傾斜したのち、垂直に立ち上がっていた。

遺構の切り合い関係は、第80・81号住居跡より新しかった。

1から7は、高台付椀である。1・4は須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。7は、底部外面に墨書「家」がみられる。8は、須恵器（HS）の甕である。9・10は、土師器の甕である。4から7は口縁部、8・10は胴部上位以下が欠損している。

11は、土師器の羽釜である。12は、土師器の甑である。11は胴部上位以下、12は胴部中位以上と底部が欠損している。

13は鉄製環状品、14は鉄製鎌の柄装着部である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第82号竪穴式住居跡を中堀Ⅸ期に位置付けたい。

第83号住居跡（第166図・第167図）

K－7グリッドで確認した。周辺の遺構は、比較的疎らであったが、第14号区画溝との重複部分が多く確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.21m・短辺2.61m・深さ0.2mであった。

主軸方位は、N－89°－Wであった。

カマドは、東壁のやや北寄りに検出した。袖は、検出できなかった。燃焼部は、住居内に大部分が造られたと推定され、極く浅い円形の窪みがみられた。

貯蔵穴は、カマド右側の南東部で検出した。形状は、円形であった。径0.74m・深さ0.15mであった。

遺構の切り合い関係は、第14号区画溝より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の坏（3）が出土し、貯蔵穴内から須恵器の高台付鉢（7）が出土した。

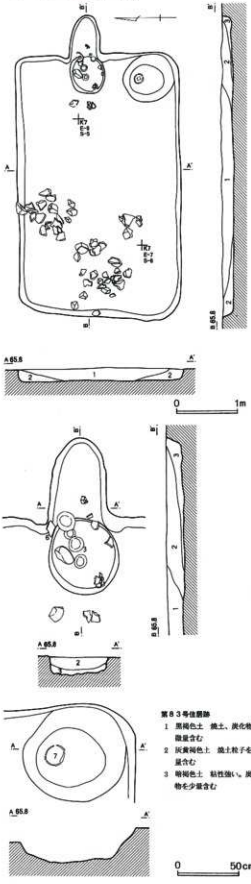
1は、土師器の坏AⅦである。2は、土師器の坏Bである。2は、底部が欠損している。

3は、須恵器（HS）の椀である。

4は、黒色土器の椀である。4は、外面口縁部に黒色の付着物が確認できる。煤の痕跡と考えられる。

5は、土師器の甕である。5は、口縁部のみである。

第166図　第83号住居跡



6は、須恵器（S）の高脚高台付椀である。6は、口縁部が欠損している。

7は、須恵器（NS）の高脚高台付鉢である。7は、口縁部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第83号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第84号住居跡（第168図）

K－8グリッドで確認した。周辺は、住居跡・溝・小穴などの遺構が密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、不整方形であった。規模は、長辺3.13m・短辺3.04m・深さ0.34mであった。

主軸方位は、N－42°－Eであった。

カマドは、検出されなかった。

遺構の切り合い関係は、第14号区画溝より新しかった。

1から5は、高台付椀である。2・4が須恵器（HS）である。ほかは須恵器（NS）である。1は底部、2から5は口縁部が欠損している。

6は、土師器の甕である。6は、口縁部のみである。

7から9は、羽釜である。9が須恵器（HS）、ほかは須恵器（NS）である。10は、須恵器（HS）の羽釜である。11は、須恵器（S）の大甕である。7から10は、胴部上位以下が欠損している。11は、口縁部破片である。

12は、砥石である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第84号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

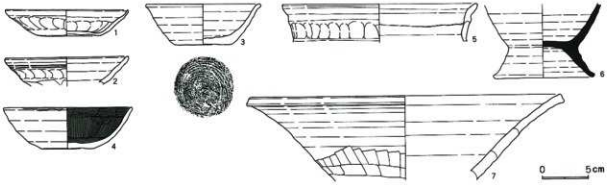
第85号住居跡（第169図）

K－8グリッドで確認した。周辺は、住居跡・溝・土壙などが密集し、確認に手間取った。住居跡の大半は、第86号住居跡で破壊され、形状など不明な点が多い。

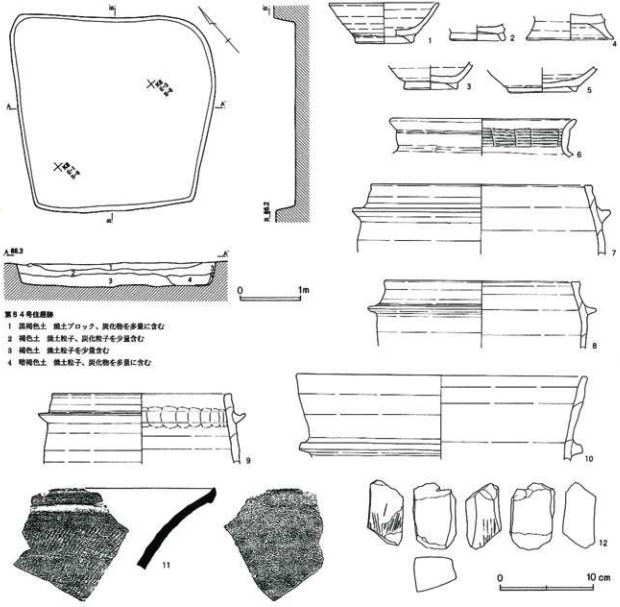
残存していた北壁は、長さ2.80m・深さ0.45mであった。住居跡の北西隅に幅30cmの壁溝を短く検出した。

主軸方位は、N－92°－Eであった。

第167図　第83号住居跡出土遺物



第168図　第84号住居跡・出土遺物



第84号住居跡
1　黒褐色土　焼土ブロック、炭化物を多量に含む
2　褐色土　焼土粒子、炭化粒子を少量含む
3　褐色土　焼土粒子を少量含む
4　暗褐色土　焼土粒子、炭化物を多量に含む

第136表　第83号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸線	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	13.0	2.8		6.6	B, C, D, E	普通		暗橙	50	
2	坏 B	H	13.0				B, D, E	普通		黄褐	30	
3	椀	HS	12.1	4.3		6.0	B, E, I			灰黄	70	
4	椀	黒色	13.6	4.3		5.3	B, C, E	良好		浅黄橙	60	
5	甕 B Ⅱ イ	H	20.5				B, H	良好		橙	15	
6	高脚高台付椀	S				10.5	B, D, E	良好		黄灰	20	
7	高脚高台付鉢	NS	33.2				A, B, E, H	良好		黄灰	25	

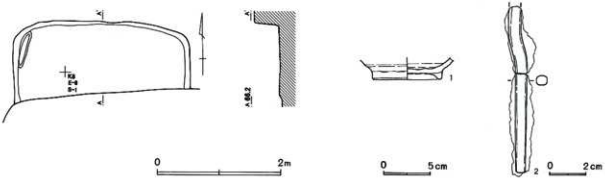
第137表　第84号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸線	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	NS	11.5	4.3		5.7	B, E	良好	L	灰黄	20	
2	高台付椀	HS				5.5	B, C, H	良好	R	淡橙	100	
3	高台付椀	NS				5.5	B, E	良好	R	灰	100	
4	高台付椀	HS				9.2	A, B, C, E, H	良好	R	灰白	70	
5	高台付椀	NS				6.9	B, H	良好	R	灰白	25	
6	甕 B	H	19.5				E, F, H	普通		暗褐	10	口縁のみ
7	羽AⅡa ロ	NS	23.5		3.0		B, D, I	良好		明灰褐	15	
8	羽AⅠa ロ	NS	20.5		3.0		B, C, I	良好		暗褐	20	
9	羽BⅡa	HS	18.9		2.3		B, C, E, I	良好		明赤褐	15	
10	甑 B Ⅰ	HS	30.8		7.9		E, C, I	良好		明灰褐	15	
11	大甕	S					B	良好		青灰	10	

第138表　第85号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸線	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	NS				7.0	B, E, I	良好		にぶい黄橙	30	

第169図　第85号住居跡・出土遺物



カマドは、東壁に構築されていたと推定されるが、重複のため明らかにできなかった。

遺構の切り合い関係は、第86号住居跡よりも古かった。

1は、須恵器（NS）の高台付椀である。1は、口縁部が欠損している。

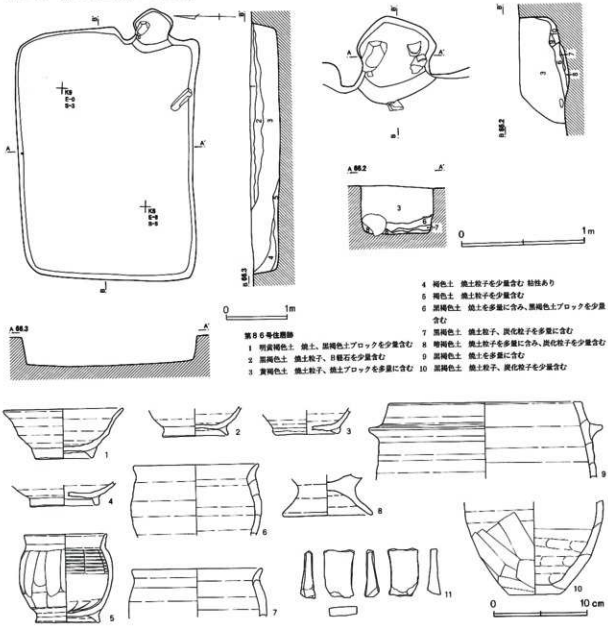
2は、棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第85号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第86号住居跡（第170図）

K－8・9グリッドで確認した。周辺は、住居跡・

第170図　第86号住居跡・出土遺物



溝・土壙などが密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.00m・短辺2.77m・深さ0.45mであった。

主軸方位は、N－88°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。左袖は、地山を掘り残して造られ、住居跡内に短く伸びていた。右袖は、壁をそのまま利用していた「片袖型」であった。焚き口部は、やや狭くなっていた。燃焼部は、不整形の浅い掘り込みがあった。燃焼部内からカマド構築材の川原石が出土した。

遺構の切り合い関係は、第85号住居跡、第260・273号土壙より新しかった。

1から4は、高台付椀である。1・4は、須恵器（NS）である。他は、須恵器（HS）である。2は口縁部、3・4は口縁部と底部が欠損してる。

5は、土師器の甕である。

6・7・10は、須恵器（HS）の甕である。8は、土師器の甕である。9は、須恵器（HS）の羽釜である。6は胴部中位以下、7・9は胴部上位以下、10は胴部中位以上が欠損している。8は、底部のみである。

第139表　第86号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸輪	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	NS	12.4	5.2		5.9	B, D, E, H	良好	R	灰白	20	
2	高台付椀	HS				6.8	B, C, E, H	良好	R	明褐	50	
3	高台付椀	HS				6.5	B, E, H	良好	R	黒褐	25	
4	高台付椀	NS				7.0	B, C, D, H	良好	R	灰	25	
5	台付甕	H	8.6	9.3		6.5	B, D, E	普通		暗橙	60	
6	ロクロ甕	HS	13.1				B, E	良好		外－暗褐。内－黒	20	
7	ロクロ甕	HS	13.7				B, C, D, I	良好		外－暗赤褐。内－黒	80	
8	台付甕底部	H				9.1	B, E, G, I	普通		にぶい橙	10	
9	羽BⅡa	HS	20.2		2.8		B, D, I	良好		灰褐	15	
10	羽釜	HS				5.5	B, C, D, I	良好		外－明赤褐。内－黒	90	

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第86号竪穴式住居跡を中堀期に位置付けたい。

第87号住居跡（第171図・第172図・第173図・第174図）

K－9グリッドで確認した。周辺は、住居跡・溝・土壙などが密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.59m・短辺2.60m・深さ0.30mであった。

主軸方位は、N－101°－Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに二基並んで検出した。覆土の堆積状況から、二基のカマドは、住居跡の埋没まで併用されていたと推定される。

両カマドとも袖は、造られていなかった。1号カマドは、焚き口部の両脇に川原石を補強材として使用していた。燃焼部はやや狭く、焚き口部の前面から燃焼部にかけては、楕円形に浅く掘り込まれていた。さらに燃焼部は、円形に浅く窪んでいた。

一方、2号カマドの焚き口部の右側には補強材が出土しなかった。燃焼部は、やや深く楕円形に掘り込まれ、煙道部に緩やかに傾斜しながら移行していた。また煙道部の入り口には、補強材の土師器の甕（41・45）が出土した。

二基のカマド内、およびカマド周辺は、カマドの構築材の川原石が多量に出土した。

貯蔵穴は、2号カマドの右側南東部で検出した。形状は、不整楕円形で規模は、長径0.82m・短径0.58m・深さ0.09mであった。

遺構の切り合い関係は、第264号土壙より古く、第87号住居跡、第261号土壙より新しかった。

遺物は、1号カマド内から須恵器の高台付椀（12・14・20・21）・羽釜（48）が出土した。2号カマド内から須恵器の高台付椀（11）が出土した。また1号カマドの周辺からは刀子（57）・砥石（53・54）・石製の権（55）が出土した。そのほかカマド前面からは、土師器の坏（2）・須恵器の坏（9）・高台付椀（22）・灰釉陶器の高台付椀（34）・土師器の小形台付甕（36）・甕（46）・甑（49）が出土した。

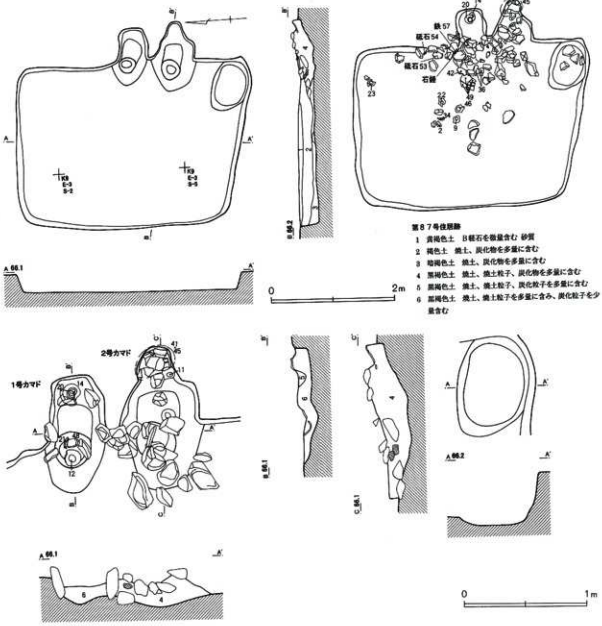
1から8は、土師器の坏である。1・2・5は坏BⅡ、3は坏BⅣ、4・6・8は坏BⅤである。7は、坏Bか、壺である。4・7・8は口縁部、6は底部が欠損している。

9・10は、椀である。9は須恵器（HS）、10は須恵器（NS）である。11から21、24から32は、高台付椀である。13・30・31が須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。22は、須恵器（HS）の高脚高台付椀である。23は、須恵器（HS）の高台付皿である。10・22・26から29・31は口縁部、16は高台、17は底部、18は底部と高台、19は口縁部・底部・高台、24・25は口縁部と高台、30・32は口縁部と底部が欠損している。

33は、灰釉陶器の高台付輪花椀である。34・35は、灰釉陶器の高台付椀である。34は底部と高台、35は口縁部が欠損している。

36から46は、土師器の甕の底部である。47・48は、

第171図　第87号住居跡



羽釜である。47は須恵器（ＨＳ）、48は須恵器（ＮＳ）である。49・50は、須恵器（ＮＳ）の甑である。37・41から43は胴部下位以下、44・47・49は胴部中位以下、45は胴部上位以下が欠損している。38から40・46・48・50は底部のみである。

51・52は、須恵器（Ｓ）の甕である。51・52は体部破片である。

53・54は、砥石である。

55は、棹計りの権である。

56は、凝灰岩の切石である。

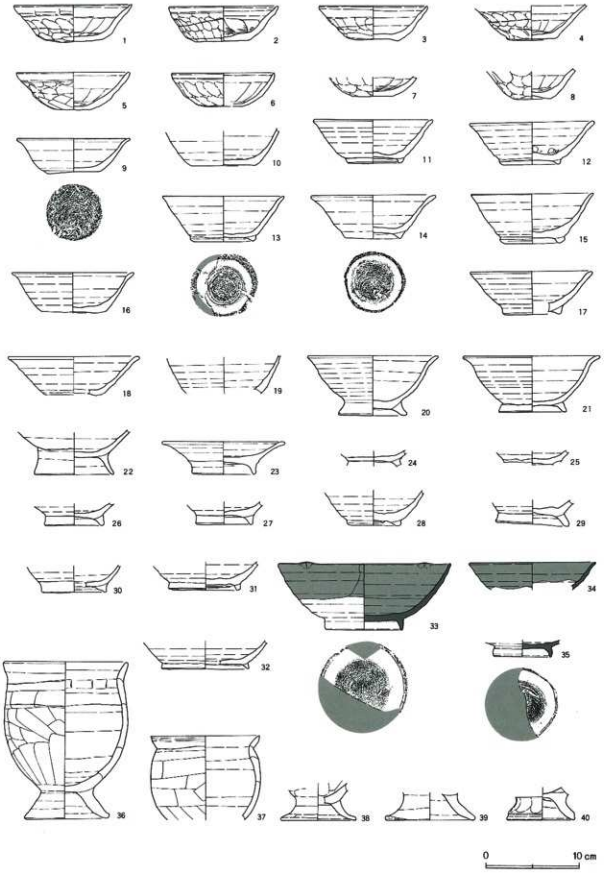
57から59は、鉄製品である。57は刀子、58・59は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第87号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

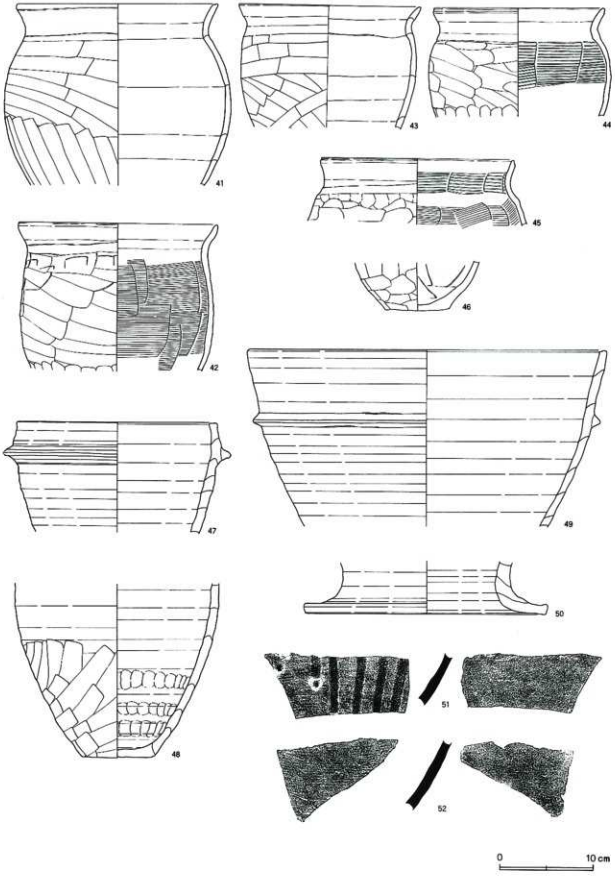
第88号住居跡（第175図・第176図）

Ｊ・Ｋ－９グリッドで確認した。周辺は、住居跡・溝・土壙など密集し、確認に手間取った。

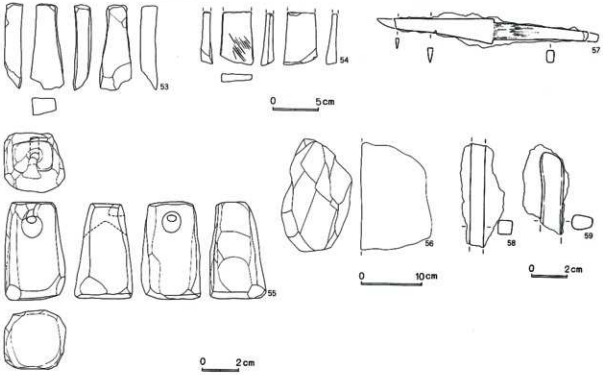
第172図　第87号住居跡出土遺物（1）



第173図　第87号住居跡出土遺物（2）



第174図　第87号住居跡出土遺物（3）



第140表　第87号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輔輪	色調	残存	出土位置その他
1	坏 B Ⅱ	H	12.3	3.9		6.0	B, E, K	不良		やや暗い黄橙	40	
2	坏 B Ⅱ	H	11.4	3.7		5.4	B, E	普通		暗橙	80	
3	坏 B Ⅳ	H	11.4	3.7		4.7	B, D, K	良好		橙	100	2号カマド
4	坏 B Ⅴ	H				5.1	B, E, H	普通		淡黄橙	40	カマド
5	坏 B Ⅱ	H	11.9	3.9		3.7	B, E, H	普通		暗茶褐	30	
6	坏 B Ⅴ	H	10.7	3.6		4.7	B, H	不良		やや暗い黄土	30	
7	坏 B か 壺	H				4.3	B, E, F, H	普通		暗茶橙	40	2号カマド
8	坏 B Ⅴ	H				3.9	B, E, F	普通		暗茶褐	20	2号カマド
9	椀	HS	11.9	3.8		5.4	B, C, D,	良好	R	外－灰褐。内－黒褐	70	
10	椀	NS				6.7	B, E, I	普通	R	褐灰	30	
11	高台付椀	HS	12.1	4.6		5.4	A, B, C, D, E, G	良好	R	灰褐色	70	2号カマド
12	高台付椀	HS	13.0	4.5		5.7	B, E, G, K	良好	R	外－淡黄橙。内－暗灰褐	70	1号カマド
13	高台付椀	NS	12.7	4.8		6.1	B	良好	R	灰白	90	2号カマド
14	高台付椀	HS	13.0	4.6		5.8	C, D, E	良好	R	明赤褐	80	1号カマド
15	高台付椀	HS	12.8	5.3		5.7	B, C, E, G	良好	R	淡黄褐	40	
16	高台付椀	HS	12.8				B, D, E	良好	R	暗褐	60	
17	高台付椀	HS	12.9	4.5		5.8		良好	R	明褐	20	
18	高台付椀	HS	13.7				B, E, I	良好	R	灰白	30	
19	高台付椀	HS					B, E	普通	R	灰褐	20	
20	高台付椀	HS	13.7	6.3		7.0	B, C, D, I, K	良好	R	外－暗褐。内－赤褐	70	
21	高台付椀	HS	14.3	5.9		7.1	A, B, K	良好	R	底－黒。体－赤褐	70	
22	高脚高台付椀	HS				8.1	B, E	普通	L	黄灰	60	
23	高台付皿	HS	12.8	3.4		6.5	B, H, K	良好	R	淡橙	60	
24	高台付椀	HS					B, C, E	良好	R	明赤褐	100	底のみ
25	高台付椀	HS					B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	10	
26	高台付椀	HS				6.1	A, B, C, E, I	良好	R	明赤褐	100	底のみ
27	高台付椀	HS				5.7	B, C, D, E	良好	R	明褐	100	底のみ
28	高台付椀	黒色				5.2	B, E	良好	R	黒褐	100	底部

第141表　第87号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
29	高台付椀	HS				7.7	A, B, C, E	良好	R	明赤褐	100	底のみ
30	高台付椀	NS				6.4	B, E	普通	R	灰白	10	
31	高台付椀	NS				6.8	B, E, I	普通	L	灰白	20	
32	高台付椀	HS				8.9	B, E, I	普通	R	淡黄	10	
33	高台付輪花椀	K	18.3	7.1		8.0	D	良好		淡灰白	40	
34	高台付椀	K	13.2				D	良好		淡灰	20	口縁のみ
35	高台付椀	K				6.0	B, D	良好		淡灰	10	
36	台付甕	H	12.7	16.6		8.0	B, D, E, G, K	良好		外－暗赤褐。内－黒	50	
37	甕A	H	11.4				B, E	良好		暗褐	20	
38	台付甕底部	H				7.7	D, E, I	良好		明褐	40	
39	台付甕底部	H				9.2	B, D, E	良好		明赤褐	60	
40	台付甕底部	H				7.0	B, E, H	普通		暗茶褐	10	脚部のみ
41	甕AⅠb	H	20.9				B, D, E	良好		明褐	40	2号カマド
42	甕AⅣc	H	21.2				B, E, F, H	不良		暗橙	20	口縁部のみ
43	甕AⅣc	H	19.0				B, D, E	良好		明褐	40	
44	甕AⅢc	H	17.9				E, F	良好		茶褐	10	
45	甕AⅢc	H	20.4				E, F, H, K	良好		暗茶褐		2号カマド
46	甕底部	H					B, E, F	普通		黄土	10	底部のみ
47	甑BⅡ	HS	21.1		3.3		B, C, D, I	良好		暗褐	20	
48	羽釜底部	NS				7.8	A, B, I	良好		灰白	40	1号カマド
49	甑BⅠ	NS	37.8		7.5		B, C, D, G, I	良好		外－灰。内－灰白	20	
50	甑	NS				25.1	B, E	良好		暗灰褐	20	
51	甕	S					B, I	良好		灰	5	
52	甕	S					B, I	良好		灰白	5	

住居跡の形状は、北東部のやや突き出した不整長方形であった。規模は、長辺3.29m・短辺2.81m・深さ0.19mであった。

主軸方位は、N－90°－Eであった。

住居跡の北東隅には、長径1.55m・短径1.0m・深さ0.11mの不整長方形の土壙を検出した。またカマドの前面から南壁にかけて、長径1.55m・短径1.12m・深さ0.13mの土壙を検出した。

カマドは、東壁のほぼ中央で検出した。袖は、地山を掘り残して造られ、住居跡内にわずかに伸びていた。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、円形に浅く窪みがみられた。焚き口部の前面に径0.35m・深さ0.22mの円形の掘り込みを検出した。焼土・炭・砂利を多量に出土した。

遺構の切り合い関係は、第87号住居跡より古かった。

1から6は、高台付椀である。4は須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。1は底部、2は高台、3は口縁部と底部、4から6は口縁部が欠損している。6は、高台内面に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

7は、黒色土器の高台付椀である。

8から10は、灰釉陶器の高台付椀である。9は底部と高台、10は口縁部と底部が欠損している。

11は、須恵器（HS）の甕である。12から17は、羽釜である。14は須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。11は胴部上位以下、12は胴部下位以下、13・14・15は胴部中位以下が欠損している。16・17は、底部のみである。

18・19は、鉄製品である。18・19は棒状鉄製品である。19は先端が尖る。

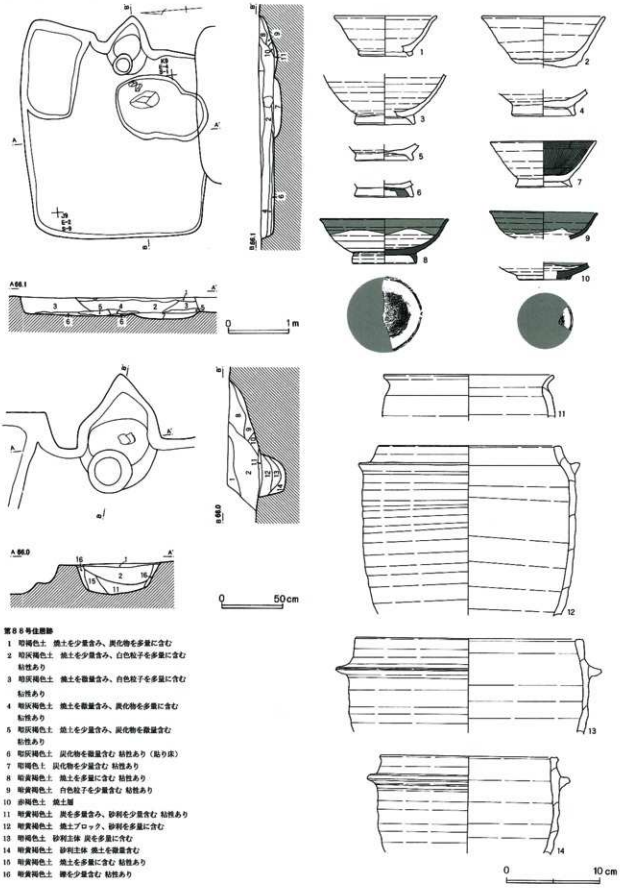
以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第88号竪穴式住居跡を中堀K期に位置付けたい。

第89号住居跡（第177図）

J－9グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙・小穴など激しく重複し、確認に手間取った。

住居跡の大半は、第91号住居跡に破壊され、不明な点が多かった。残存していた北壁は、長さ2.55m・深

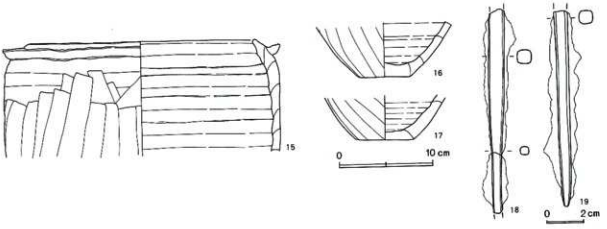
第175図　第88号住居跡・出土遺物（1）



第88号住居跡

1　明褐色土　焼土を少量含み、炭化物を多量に含む
2　明灰褐色土　焼土を少量含み、白色粒子を多量に含む
　粘性あり
3　明灰褐色土　焼土を微量含み、白色粒子を多量に含む
　粘性あり
4　明灰褐色土　焼土を微量含み、炭化物を多量に含む
　粘性あり
5　明灰褐色土　焼土を少量含み、炭化物を微量含む
　粘性あり
6　明灰褐色土　炭化物を微量含む 粘性あり（貼り床）
7　明褐色土　炭化物を少量含む 粘性あり
8　明黄褐色土　焼土を多量に含む 粘性あり
9　明黄褐色土　白色粒子を少量含む 粘性あり
10　赤褐色土　焼土層
11　明黄褐色土　炭を多量含み、砂利を少量含む 粘性あり
12　明黄褐色土　焼土ブロック、砂利を多量に含む
13　明褐色土　砂利主体 炭を多量に含む
14　明黄褐色土　砂利主体 焼土を微量含む
15　明黄褐色土　焼土を多量に含む 粘性あり
16　明黄褐色土　灰を少量含む 粘性あり

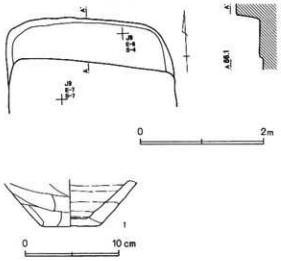
第176図　第88号住居跡出土遺物（2）



第142表　第88号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸線	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS	10.8	4.3	5.1		B, E, I	普通		黄灰	30	
2	高台付椀	HS	12.9				B, E, I	良好		にぶい橙	95	
3	高台付椀	HS				6.0	B, E, I	普通		にぶい黄橙	30	
4	高台付椀	NS					B, E, I	普通		灰白	20	
5	高台付椀	HS				5.8	B, E, I	普通		灰黄	20	
6	高台付椀	HS				6.0	B, E, I	普通		にぶい黄橙	10	
7	高台付椀	黒色	11.1	4.8		5.8	B, E, I	普通		外－淡黄。 内－黒褐	40	
8	高台付椀	K	13.6	4.7		6.7	B, D	良好		灰白	40	
9	高台付椀	K	11.4				D	良好		灰白	20	
10	高台付椀	K				5.1	D	良好		灰白	10	
11	ロクロ甕	HS	18.0				D, E, I	良好		淡橙褐	15	
12	羽AⅠbロ	HS	19.3		1.9		B, C, E	良好		外－暗褐。 内－明褐	70	
13	羽BⅡb	HS	24.1		3.4		B, C, I, K	良好		明赤褐	20	カマド
14	甑c	NS	18.7		2.4		B, D, I	良好		灰褐	15	
15	土師羽釜B	HS	24.3		0.6		B, C, I, K	良好		明赤褐	10	
16	羽釜底部	HS				5.4	B, C, E, G, I	良好		明赤褐	50	カマド
17	羽釜底部	HS				6.0	B, C, I	良好		外－暗褐。 内－明褐	25	

第177図　第89号住居跡・出土遺物



さ0.39mであった。

遺構の切り合い関係は、第91号住居跡より古く、第254号土壙より新しかった。

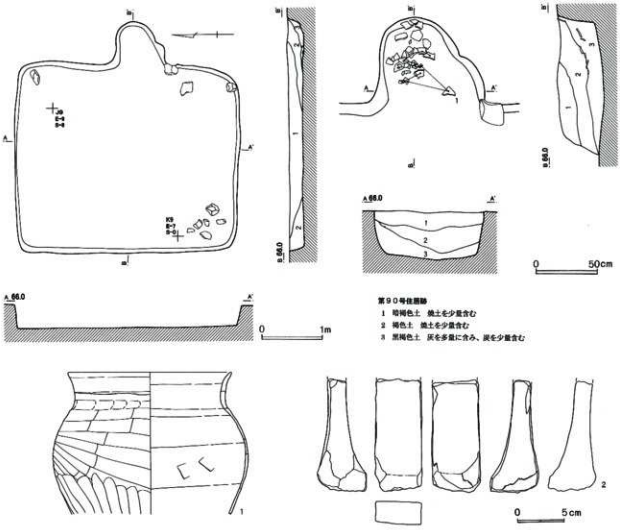
1は、須恵器（HS）の羽釜である。1は、底部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第89号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第90号住居跡（第178図）

J－9・10、K－9グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙・小穴など激しく重複し、確認に手間取った。

第178図　第90号住居跡・出土遺物



住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺3.58m・短辺3.00m・深さ0.35mであった。

主軸方位は、N－90°－Eであった。

カマドは、東壁の中央で検出した。焚き口部の左側に補強材の川原石が使用されていたことから、当初から袖は造られていなかったと判断した。燃焼部の掘り込みは、みられなかった。

遺構の切り合い関係は、第91号住居跡より古かった。

遺物は、カマドの燃焼部内から土師器甕（1）が出土した。

1は、土師器の甕である。1は、胴部下位以下が欠損している。

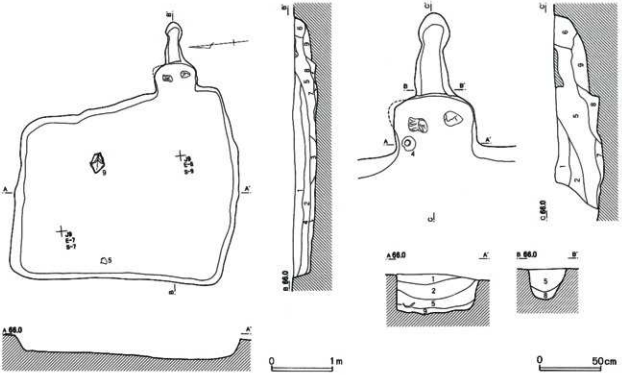
第143表　第89号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	輪積	色調	残存	出土位置その他
1	羽釜底部	HS				5.4	B, E, H	良好		浅黄橙	25	

第144表　第90号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	輪積	色調	残存	出土位置その他
1	甕Ⅱc	H	17.2				B, E	良好		橙	70	カマド

第179図　第91号住居跡・出土遺物



第91号住居跡

1　黄褐色土　B軽石を多量に含み、砂礫を少量含む 粘性あり

2　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子、砂礫、B軽石少量含む

3　暗褐色土　酸化鉄粒子、焼土粒子を多量含む 粘性あり

4　暗褐色土　焼土、炭化物を微量含む

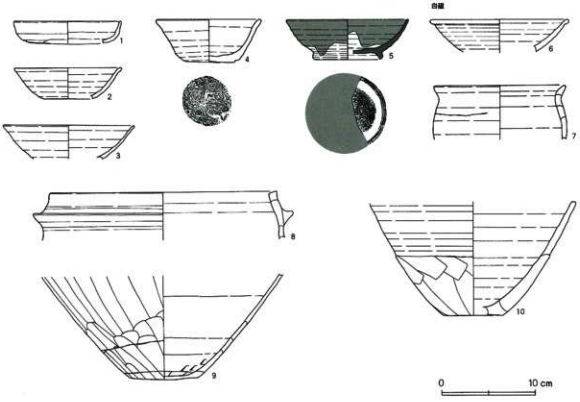
5　黒褐色土　焼土、炭化物を少量含む

6　黒褐色土　焼土、炭化物を微量含み、黄褐色土ブロックを多量に含む

7　黒褐色土　焼土を少量含み、炭化物、灰を多量に含む

8　暗褐色土　焼土、炭化物を少量含み、灰を多量に含む

9　暗褐色土　焼土、炭化物を多量に含む



2は、砥石である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第90号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第91号住居跡（第179図）

J－9グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙・小穴など激しく重複し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、北壁が短く南壁の長い台形であった。規模は、長辺3.55m・短辺2.92m深さ0.33mであった。

主軸方位は、N－95°－Eであった。

カマドは、東壁の南東隅寄りに検出した。袖を造られなかったと解釈した。燃焼部は、整った方形で、火床面に小さな凹凸がみられた。燃焼部内からは、支脚の川原石が、二個並んでいたことから、二つ掛けカマドと推定される。燃焼部から煙道部には、小さな段をもって移行していた。煙道部は、長さ0.66mと細長く、地山を掘り抜いて造られていた。煙り出し部は、緩やかに傾斜したのち、垂直に立ち上がっていた。

遺構の切り合い関係は、第89・90号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器坏（4）が出土した。

1は、土師器の坏である。1は、底部が欠損している。

2から4は、椀である。4は須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。2・3は、底部が欠損している。

5は、灰釉陶器の高台付椀である。5は、底部が欠損している。

6は、中国（定窯）産の白磁の高台付椀である。6は、底部と高台が欠損している。

7は、須恵器（HS）の甕である。9は、土師器の甕である。8・10は、羽釜である。8は須恵器（NS）、10は須恵器（HS）である。7は胴部中位以下、8は胴部上位以下が欠損している。9・10は、底部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第91号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第92号住居跡（第180図）

J－9・10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙・小穴など密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.47m・短辺2.85m・深さ0.18mであった。住居跡の中央やや西寄りには、長径0.55m・短径0.38m・深さ0.12mの小穴一基を検出した。

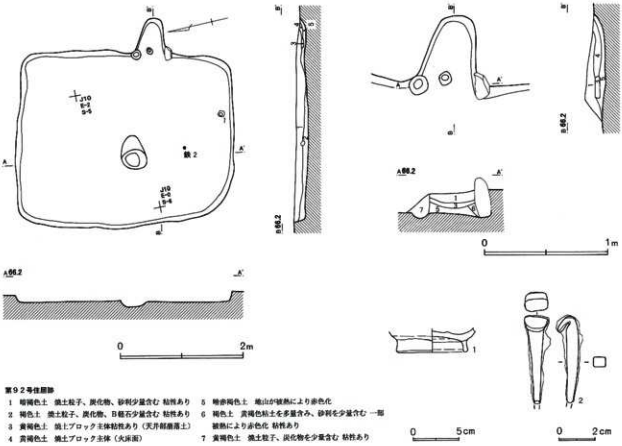
第145表　第91号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鐸	底径	胎土	焼成	軸幅	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.3				B, D, E	不良		淡黄橙	20	
2	椀	HS	11.4				E, I	良好		橙	10	
3	椀	HS	13.8				B, E	普通		橙	10	
4	椀	NS	10.8	4.5		5.1	B, E, H	良好		灰白	100	カマド
5	高台付椀	K	12.8	4.2		7.0	K	良好		淡灰白	30	
6	高台付椀	白磁	14.4					良好		白	10	
7	ロクロ甕	HS	13.8				B, E, H	良好		外－淺黄橙。内－黒	20	
8	羽AⅠaロ	NS	24.0		2.3		A, B, E, H	良好		灰白	15	
9	甕底部	H				7.4	B, E	良好		橙	100	
10	羽釜底部	HS				6.3	A, B, E, H	良好		外－淺黄橙。内－灰白	40	

第146表　第92号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鐸	底径	胎土	焼成	軸幅	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS				7.2	B, E, I	普通		灰黄	20	

第180図　第92号住居跡・出土遺物



主軸方位は、N－100°－Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。焚き口部の右側に補強材の川原石を使用していたことから袖は造られなかったと判断した。なお、焚き口部の左側からも補強材の抜取り痕跡を検出した。

燃焼部内には、径0.11ｍの浅い窪みがみられた。支脚の抜き取り痕跡とも考えられたが、焚き口に寄り過ぎていたために断定はできない。燃焼部内の掘り込みは、みられなかった。

遺構の切り合い関係は、第265号土壙より古かった。

遺物は、住居跡南側から須恵器の高台付椀（1）、釘（2）が出土した。

1は、須恵器（HS）の高台付椀である。1は、口縁部が欠損している。

2は鉄製の釘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第92号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第93号住居跡（第181図）

J・K－10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙・小穴など激しく重複し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、不整長方形であった。規模は、長辺2.78ｍ・短辺1.64ｍ・深さ0.33ｍと小形の住居跡であった。

主軸方位は、N－80°－Eであった。

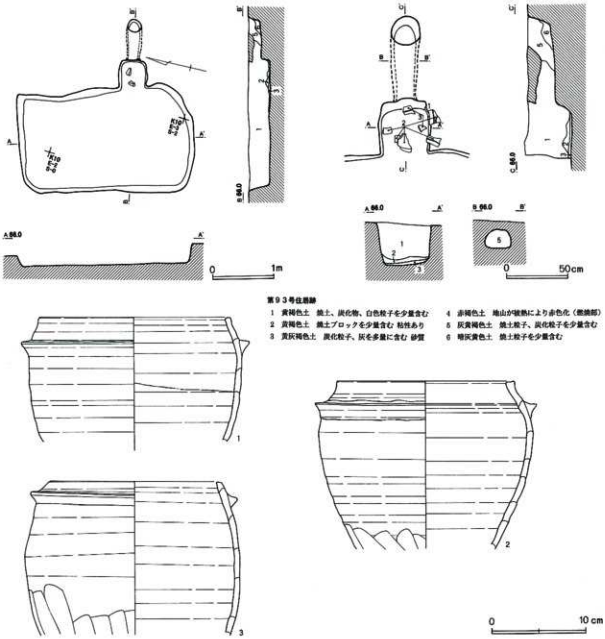
カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は造られなかったと判断した。燃焼部は、整った長方形で、底面の掘り込みはみられなかった。煙道部へ段をもって移行していた。煙道部は、地山を掘り抜いて造られ、長さ0.73ｍと細長かった。煙り出し部は、急な傾斜で立ち上がっていた。

遺構の切り合い関係は、第94号住居跡より古かった。

遺物は、カマド内から羽釜（1・2・3）が出土した。

1から3は、羽釜である。1は須恵器（NS）、他

第181図　第93号住居跡・出土遺物



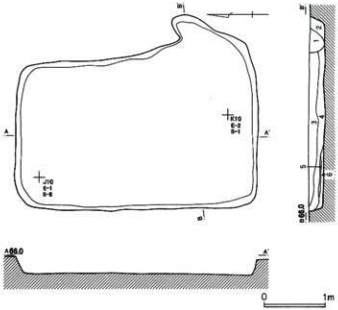
は、須恵器（ＨＳ）である。１から３は、胴部下位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第93号竪穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第147表　第93号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸輪	色調	残存	出土位置その他
1	羽ＡⅡａロ	ＮＳ	20.1		2.8		B, E, H	良　好		灰　白	15	カマド
2	羽ＡＩａイ	ＨＳ	18.9		2.5		B, E, H, K			外－淺黄橙、内－黒	40	カマド
3	羽ＢⅡｂ	ＨＳ	17.7		1.8		B, C, H, K	良　好		灰　白	80	カマド

第182図　第94号住居跡・出土遺物



第94号住居跡
1　暗褐色土　焼土ブロックを多量に含み、焼土粒子、炭化粒子を少量含む　粘性あり
2　褐色土　粘性あり
3　黒褐色土　焼土ブロック、砂礫、炭化粒子を多量に含み、B粒石を少量含む　粘性あり
4　黄褐色土　焼土ブロック、炭化粒子を少量含み、B粒石を微量含む　粘性あり
5　黒色土　炭化物層
6　黄褐色土　焼土ブロック、炭化粒子を多量に含み、B粒石を微量含む　粘性あり

第94号住居跡（第182図）

J－K－10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙・小穴などの遺構が密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、不整長方形であった。規模は、長辺3.85m・短辺2.60m・深さ0.25mであった。

主軸方位は、N－85°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。燃焼部が北に大きく歪み、袖や構築材などは検出できなかった。

遺構の切り合い関係は、第93号住居跡より新しかった。

1は、須恵器（HS）の高台付椀である。1は、口縁部が欠損している。

2は、灰釉陶器の高台付皿である。2は、口縁部が欠損している。

3は、土錘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第94号竪穴式住居跡を中堀K期に位置付けたい。

第95号住居跡（第183図）

J－10グリッドで確認した。周辺は、住居跡や土壙が密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、南西隅がやや突き出した不整長方形であった。規模は、長辺2.25m・短辺1.80m・深さ0.20mと小形の住居跡であった。

主軸方位は、N－70°－Eであった。

カマドは、東壁のほぼ中央で検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。焚き口部の前面から燃焼部に、楕円形の浅い掘り込みを検出した。

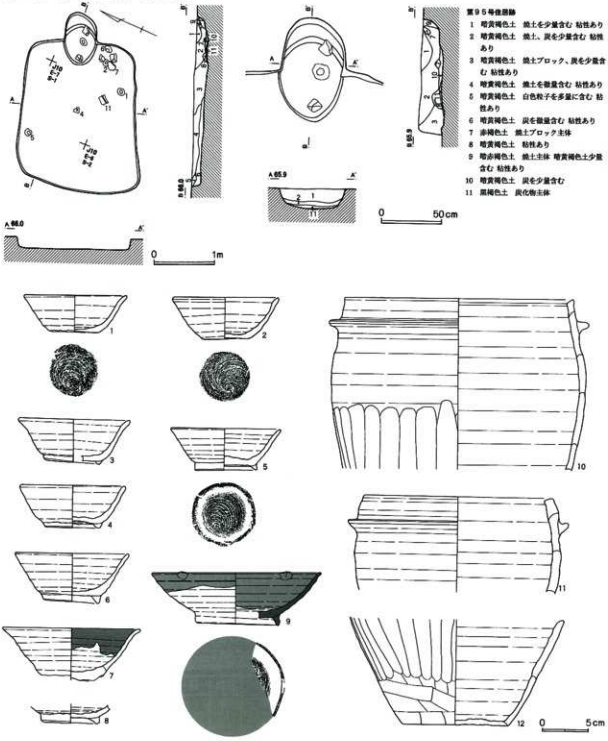
第148表　第94号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	輔輪	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS				5.7	B,C,I	良好		にぶい橙	20	
2	高台付皿	K				5.9	B	良好		乳灰粒子	30	

第149表　第94号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
3	浅黄	100	6.7	2.2	0.5	24.6	C1	Ia	158	

第183図　第95号住居跡・出土遺物



遺構の切り合い関係は、第288号土壙より古かった。

遺物は、カマドの右脇から須恵器の坏（1・2）・高台付椀（6・7）・羽釜（11）が出土し、住居跡の中央から須恵器の高台付椀（4）が出土した。

1・2は、須恵器（HS）の椀である。

3から8は、須恵器（HS）の高台付椀である。3は底部、7は高台、8は口縁部が欠損している。7は、内面口縁部から体部にかけて黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

9は、灰釉陶器の高台付輪花椀である。9は、底部

第150表　第95号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	10.8	3.9		5.0	B, E, G	良好		灰黄褐	100	
2	椀	HS	11.0	4.4		4.9	B, C, E, G	良好		にぶい黄橙	100	
3	高台付椀	HS	11.6	4.7		5.5	B, C, E, G, I	良好		にぶい黄橙	95	
4	高台付椀	HS	10.9	4.5		5.6	B, C, E, G	良好		淡黄	60	
5	高台付椀	HS	11.5	4.5		6.4	B, E	良好		褐灰	90	
6	高台付椀	HS	11.9	5.3		5.6	B, C, E, G	普通		黄灰・赤（内面一部）	90	
7	高台付椀	HS	14.3				B, C, G	良好		外－灰白。内－褐灰	90	
8	高台付椀	HS				5.5	B, E, G	良好		内－淡黄。外－黒褐	20	
9	高台付輪花椀	K	17.7	5.6		8.4		良好		灰白	40	
10	羽 B Ⅱ a	HS	24.0		2.8		B, E, H	良好		外－浅黄。内－橙	15	
11	羽 B Ⅱ a	HS	19.8		2.7		B, E, H	良好		灰白	15	
12	羽釜	HS					B, E, H	良好		浅黄	90	

が欠損している。

10から12は、須恵器（HS）の羽釜である。10は胴部下位以下、11は胴部中位以下が欠損している。12は底部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第95号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第96号住居跡（第185図）

J－10グリッドで確認した。周辺は、住居跡や土壙の重複が激しく、確認に手間取った。

住居跡の大半が第98号住居跡で破壊されていたが、形状は長方形であると判断できた。北壁は、長さ2.36m・深さ0.08mであった。

推定される主軸方位は、N－75°－Eであった。

遺構の切り合い関係は、第98号住居跡・第287号土壙より古く、第97号住居跡・第290号土壙より新しかった。

図示できる遺物は、出土しなかった。

以上、遺構の重複関係から第96号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第97号住居跡（第184図）

J－10グリッドで確認した。周辺は、住居跡や土壙と激しく重複し、確認に手間取った。

住居跡の北半分を第96号住居跡で破壊されるため、形状など不明な点が多かった。残存する南壁は、長さ2.73m・深さ0.20であった。西壁に幅20cmの壁溝を検出した。

主軸方位は、N－87°－Eであった。

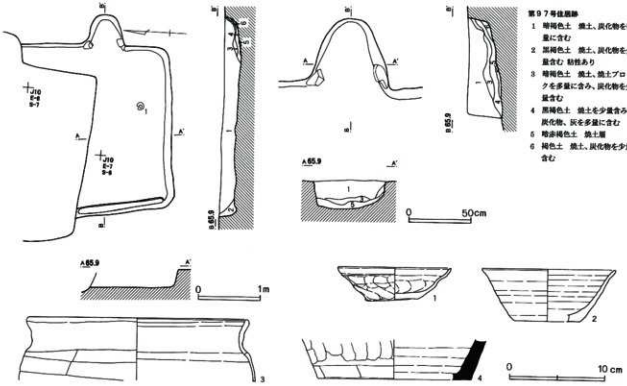
カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。焚き口部の両側に補強材の川原石が使用されていたからである。燃焼部の掘り込みはみられず、煙道部へ向かい緩やかに傾斜していた。

遺構の切り合い関係は、第96号住居跡よりも古かった。

第151表　第97号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 B	H	11.7	3.6		5.5	B, E			明橙	90	砂
2	椀	HS	13.7	5.5		6.6	B, C, E	良好		灰	25	
3	甕 A Ⅲ c	H	22.8				B, E	良好		暗赤褐	10	
4	甕底部	S				16.0	B, G	良好		灰	10	

第184図　第97号住居跡・出土遺物



1は、土師器の坏Bである。2は、須恵器（HS）の椀である。2は、底部が欠損している。

3は、土師器の甕である。4は、須恵器（S）の甕である。3は、胴部上位以下が欠損している。4は底部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第97号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第98号住居跡（第185図）

J－10グリッドで確認した。周辺は、住居跡や土壙と激しく重複し、確認に手間取った。

住居の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.60m・短辺2.61m・深さ0.32mであった。

主軸方位は、N－98°－Eであった。

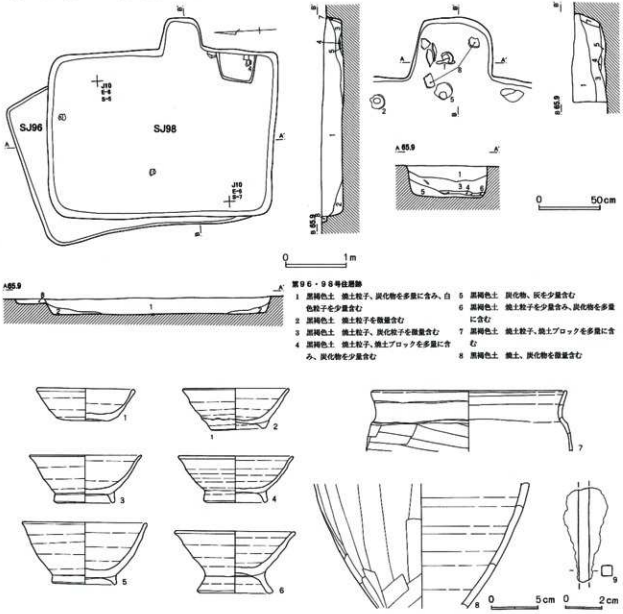
カマドは、東壁の中央で検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。燃焼部は、整った方形で、底面の掘り込みはみられなかった。

貯蔵穴は、カマドの右脇で検出した。形状は、不整方形であった。規模は、長径0.55m・短径0.48m・深さ0.03mと非常に浅いかった。

第152表　第98号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	10.1	3.4		4.6	A, B, C, E, H	良好		淡橙	70	カマド
2	高台付椀	HS	11.0	4.4		5.5	A, B, E, H	良好		浅黄橙	80	
3	高台付椀	HS	11.7	5.0		5.9	B, C, E, H	良好		橙	50	
4	高台付椀	HS	12.0	4.9		6.1	B, C, H, K	良好		橙	25	
5	高台付椀	HS	13.0	6.6		6.6	B, E, H	良好		灰白	70	カマド
6	高脚高台付椀	HS	12.6	6.6		7.3	B, E, G, H, K	良好		淡橙	25	
7	甕ⅠⅢc	H	20.3				B, H	良好		外－褐。内－橙。	15	カマド
8	羽釜	HS					B, E, H	良好		浅黄橙	40	

第185図　第96・98号住居跡・出土遺物



遺構の切り合い関係は、第96号住居跡よりも新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の坏（1）・羽釜（8）が出土し、貯蔵穴内から須恵器の高台付椀（4）が出土した。

1は、須恵器（HS）の椀である。

2から5は、須恵器（HS）の高台付椀である。6は、須恵器（HS）の高脚高台付椀である。

7は、土師器の甕である。7は、胴部上位以下が欠損している。

8は、羽釜である。8は、胴体部のみである。

9は、棒状鉄製品である。

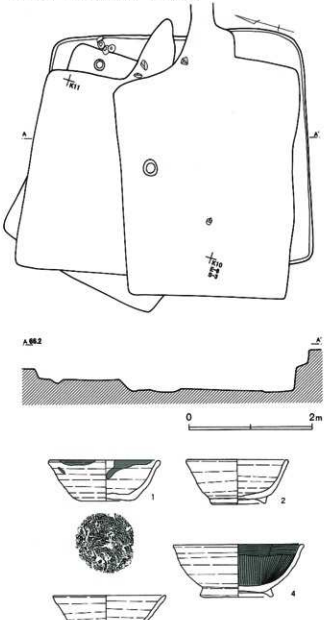
以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第98号竪穴式住居跡を中堀I期に位置付けたい。

第99号住居跡（第186図）

J・K－10・11グリッドで確認した。五軒の住居跡が重複し、確認に困難を極めた。

住居跡の大半が、重複する住居跡で破壊され不明な点が多かった。住居跡の形状は、方形と推定した。残

第186図　第99号住居跡・出土遺物



存の規模は、南壁長さ3.95m・東壁長さ3.85m・深さ0.70mであった。

推定される主軸方位は、N－162°－Eであった。

カマドは、東壁に造られていたと推定されるが、重複により破壊されていた。

遺構の切り合い関係は、第100・101・102・103号住居跡・第289号土壙より古かった。

1は、須恵器（HS）の椀である。2・3は、須恵器（HS）の高台付椀である。1は、口縁部に黒色の付着物が確認できる。煤の痕跡と考えられる。

4は、黒色土器の高台付椀である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第99号竪穴式住居跡を中堀Ⅰ期に位置付けたい。

第100号住居跡（第187図）

K－10・11グリッドで確認した。五軒の住居跡が重複し、確認に困難を極めた。

住居跡の形状は不整長方形であった。規模は、長辺3.76m・短辺2.74m・深さ0.38mであった。北壁・西壁および南壁の一部に、約0.38mの壁溝を検出した。また住居跡の中央北壁寄りに、径0.22m・深さ0.1mの小穴一基を検出した。

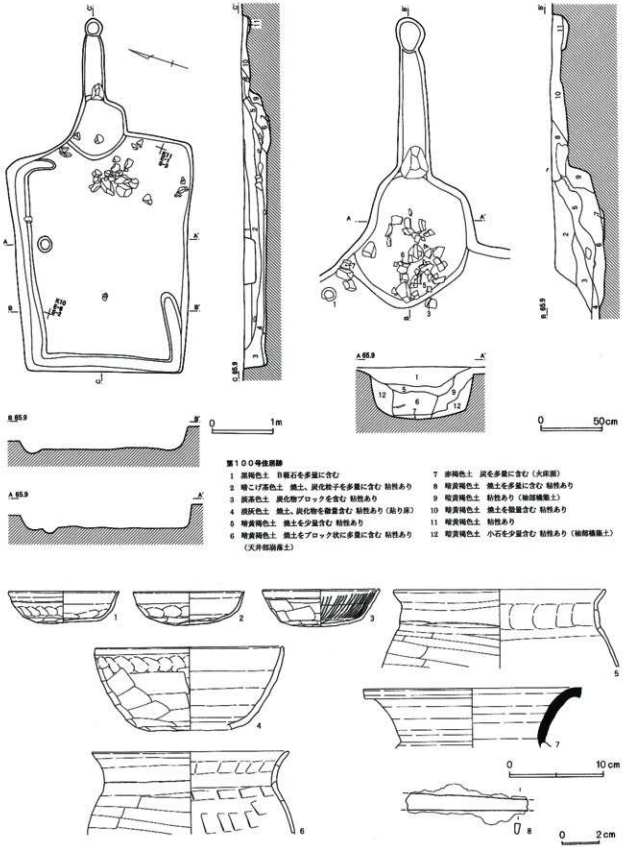
主軸方位は、N－72°－Eであった。

カマドは、東壁の中央で検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。焚き口部から燃焼部にかけて、不整円形の掘り込みがみられた。燃焼部は、煙道部に向かって緩やかに傾斜し、段をもって煙道部へ移行していた。煙道部は、長さ1.17mと非常に細長かった。煙道部と燃焼部の境からはカマド構築材の川原石が出土した。煙り出し部は、小穴状に煙道部底面を6cm掘り込

第153表　第99号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	輪積	色調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	10.5	4.4		5.5	B, E, H	良好			90	
2	高台付椀	HS	10.5	4.8		5.5	B, C, E	良好		浅黄橙	100	
3	高台付椀	HS	11.8	5.4		5.4	B, C, E, G	良好		にぶい褐	95	
4	高台付椀	黒色	13.6	5.6		7.2	B, E	良好		浅黄橙	70	

第187図　第100号住居跡・出土遺物



第100号住居跡

1　黒褐色土　B軽石を多量に含む
2　暗こげ茶色土　焼土、炭化粒子を多量に含む 粘性あり
3　淡茶色土　炭化物ブロックを含む 粘性あり
4　淡灰色土　焼土、炭化物を微量含む 粘性あり（貼り床）
5　暗黄褐色土　焼土を少量含む 粘性あり
6　暗黄褐色土　焼土をブロック状に多量に含む 粘性あり（天井部崩落土）
7　赤褐色土　炭を多量に含む（火床面）
8　暗黄褐色土　焼土を多量に含む 粘性あり
9　暗黄褐色土　粘性あり（袖部構築土）
10　暗黄褐色土　焼土を微量含む 粘性あり
11　暗黄褐色土　粘性あり
12　暗黄褐色土　小石を少量含む 粘性あり（袖部構築土）

第154表　第100号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	脚	底径	胎　土	焼　成	軸離	色　調	残存	出土位置その他
1	坏　A　Ⅳ	H	11.6	3.5		6.8	B, E	普　通		黄　褐	100	カマド
2	坏　A　Ⅳ	H	11.7	3.5		9.0	B, D	良　好		暗　褐	80	
3	坏（暗文）	H	12.2	3.9		8.7	A, B, E	良　好		暗　橙	80	カマド
4	鉢	H	19.9			12.0	B, C, D, E	普　通		淡　黄　褐	20	フク土
5	甕 B Ⅲ a	H	22.3				B, E	良　好		橙	40	
6	甕 A Ⅲ a	H	20.8				B, E	良　好		浅　黄　橙	15	カマド
7	須 恵 甕	S	23.1				B, F, K	良　好		青　灰	20	カマド

んでいた。また、カマド前面からは、構築材の川原石がまとまって出土した。

遺構の切り合い関係は、第101・102・103号住居跡より古く、第99号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から土師器の甕（5・6）が出土した。

1・2は、土師器の坏AⅣである。3は、土師器の暗文土器である。4は、土師器の鉢である。4は、底部が欠損している。

5・6は、土師器の甕である。5・6は、胴部中位以下が欠損している。

7は、須恵器（S）の甕である。7は、口縁部のみである。

8は、鉄製品の刀子茎部である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第100号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第101号住居跡（第188図）

J－10グリッドで確認した。五軒の住居跡が重複し、確認に困難を極めた。住居跡の大半を第102号住居跡が破壊し、不明な点が多かった。わずかに残った東壁の深さは、0.09mであった。

遺構の切り合い関係は、第102・103号住居跡より古く、第99・100号住居跡より新しかった。

図示できるほどの遺物は、出土しなかった。

以上、遺構の重複関係から第101号竪穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第102号住居跡（第188図）

J－10、K－10・11グリッドで確認した。五軒の住居跡が重複し、確認に困難を極めた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.75m・短辺3.01m・深さ0.19mであった。

主軸方位は、N－93°－Eであった。

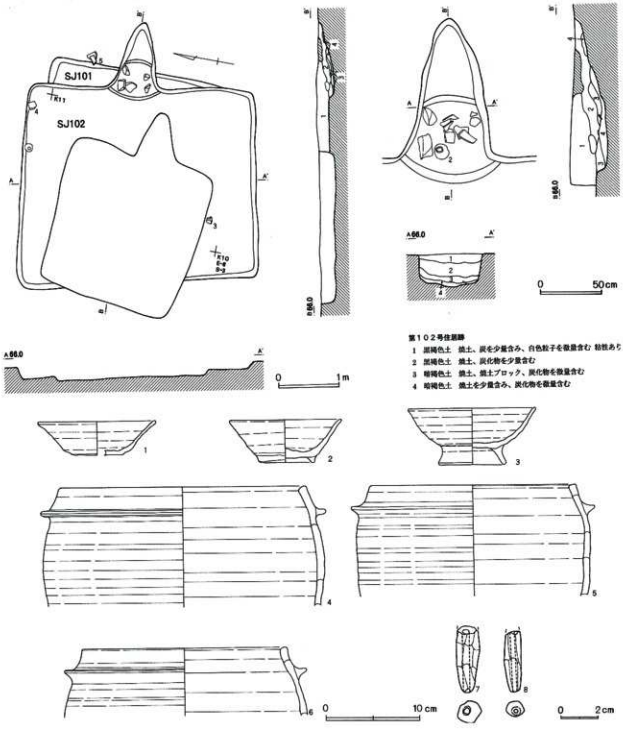
カマドは、東壁の中央で検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。焚き口部から燃焼部にかけては、浅い掘り込みがみられた。燃焼部内からは、構築材の川原石が出土した。燃焼部から煙道部へは、極く緩い段をもって移行していた。煙道部は、地山を掘り抜いて造られ、煙り出し部に向かって緩やかに傾斜していた。

遺構の切り合い関係は、第103号住居跡より古く、第99・100・101号住居跡・第289号土壙より新しかった。

第155表　第102号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	脚	底径	胎　土	焼　成	軸離	色　調	残存	出土位置その他
1	椀	H S	12.2	3.5		5.3	B	良　好		褐　灰	50	
2	高 台 付 椀	N S	11.7	4.5		5.3	B, E	普　通		灰　黄	95	カマド
3	高脚高台付椀	N S	13.2	5.9		6.7	B, E, I	普　通		黄　橙	80	
4	羽　B　Ⅰ	H S	26.0		2.7		B, E, I	良　好		にぶい黄橙	15	
5	羽 A Ⅱ b ロ	H S	21.4		2.5		B, E, H	良　好		浅　黄　橙	20	
6	羽 B Ⅱ a	H S	21.0		2.5		B, E, I	良　好		橙	20	

第188図　第101・102号住居跡・出土遺物



遺物は、カマド内から須恵器の高台付椀（2）が出土し、住居跡の北東隅から羽釜（4）が出土した。

1は、須恵器（HS）の椀である。2は、須恵器（NS）の高台付椀である。3は、須恵器（NS）の高脚高台付椀である。1は、底部が欠損している。

4から6は、須恵器（HS）の羽釜である。4・5は胴部中位以下、6は胴部上位以下が欠損している。

7・8は、土錘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第102号竪穴式住居跡を中堀期に位置付けたい。

第103号住居跡（第189図）

K－10グリッドで確認した。五軒の住居跡が重複し、確認に困難を極めた。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺2.45m・短辺2.37m・深さ0.23mであった。

主軸方位は、N－98°－Eであった。

カマドは、東壁の中央で検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

遺構の切り合い関係は、第99・100・101・102号住居跡より新しかった。

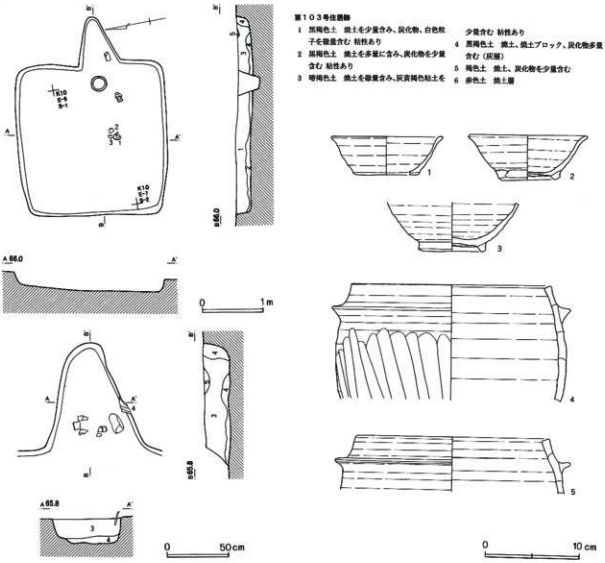
遺物は、カマド燃焼部の右壁から、羽釜の破片（4）が貼り付いて出土した。また住居中央やや南寄りから、須恵器の坏（1）・高台付椀（2・3）がまとまって出土した。

1は、須恵器（NS）の椀である。2は、須恵器（NS）の高台付椀、3は、須恵器（HS）の高台付椀である。1は底部、3は口縁部が欠損している。

4・5は、羽釜である。4は須恵器（HS）、5は須恵器（NS）である。4は胴部中位以下、5は胴部上位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第103号竪穴式住居跡を中堀期に位置付けたい。

第189図　第103号住居跡・出土遺物



第156表　第102号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
7	浅黄橙	50		1.3	0.3	4.1	C 2		402	
8	橙	90		1.0	0.2	2.3	C 2	Ⅱa	403	

第157表　第103号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	椀	N S	11.6	4.0		6.0	B, E, I	普通		褐灰	60	
2	高台付椀	N S	12.2	4.8		5.6	C, E	普通		灰白	70	
3	高台付椀	H S				6.0	B, I	良好		にぶい黄橙	40	
4	羽ＢⅡａ	H S	20.8		2.5		B, E, H	良好		明灰褐	20	カマド
5	羽ＡＩａロ	N S	20.1		2.6		B, E, H	良好		灰白	20	

第104号住居跡（第190図・第191図）

K－10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙・溝などが密集していた。

住居の形状は、長方形であった。規模は、長辺2.70m・短辺2.35m・深さ0.35mであった。

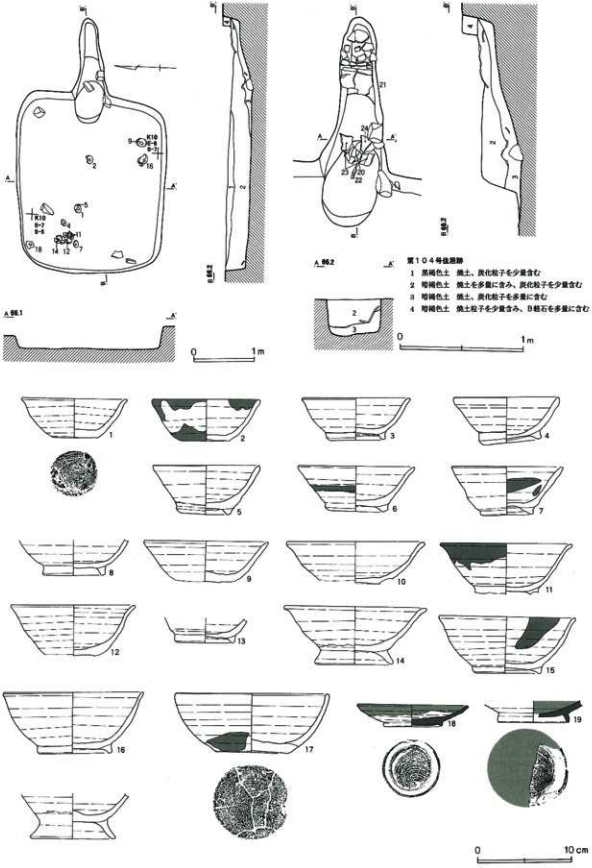
主軸方位は、N－88°－Eであった。

カマドは、東壁のやや北寄りに検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。焚き口部の右側に

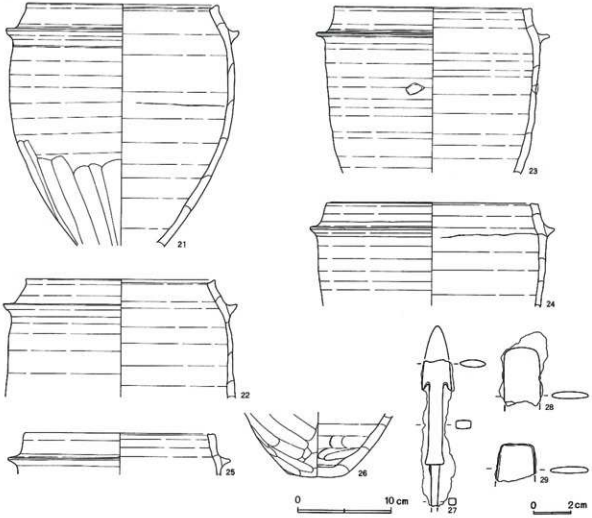
第158表　第104号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	椀	H S	11.0	4.1		4.7	B, E, H, K	良好	R	淡赤褐	100	
2	椀	H S	11.3	4.5		5.1	B, E, G, I	普通	R	灰白	90	
3	高台付椀	N S	11.3	4.6		5.7	B, E	良好	R	灰白	70	
4	高台付椀	H S	11.0	5.1		5.9	B, D, E	良好	R	明赤褐。体部下半－黒	100	
5	高台付椀	H S	11.1	5.3		5.0	B, E, H	良好	R	淡黄褐	100	
6	高台付椀	H S	12.2	4.8		5.5	B, E, I	良好	R	灰黄	75	
7	高台付椀	H S	11.7	5.2		5.4	B, C, E, H	良好	R	淡黄褐	100	
8	高台付椀	H S				6.2	B, E, H	良好	L	淡橙	100	カマド
9	高台付椀	N S	13.2				B, E, H	良好	R	明褐	100	
10	高台付椀	N S	14.4				B, E	良好	R	灰黄	35	
11	高台付椀	N S	13.7				B, E	普通	R	灰白	90	
12	高台付椀	N S	13.1				B, D, E	良好	R	灰白	100	
13	高台付椀	H S				5.9	B, E	普通	R	灰白	10	
14	高脚高台付椀	H S	15.0	6.2		7.9	B, E, G, I	普通	R	淡黄	100	
15	高台付大椀	H S	14.4	6.2		6.7	B, E, H, K	良好	R	外－淡黄褐。内－灰白	80	
16	高台付大椀	H S	14.7	6.6		7.3	B, E, H, K	良好	R	明褐	80	ヘラ書き「×」
17	大椀	H S	16.1	6.3		7.2	B, D, E	良好	R	外－淡橙。内－明褐	80	
18	高台付皿	K	11.5	2.4		5.9	B, D	良好		明灰	80	
19	高台付椀	K				7.4	D	良好		淡灰	20	
20	高脚高台付椀	H S				8.7	B, E	普通	R	橙	30	カマド
21	羽ＡＩａロ	H S	20.2		2.9		B, C, E, H	良好		外面胴中位・上－内面－黒。胴中位以下－暗褐	80	カマド
22	羽ＡⅡｂロ	H S	20.0		2.6		B, E, H	良好		淡橙	20	カマド
23	羽ＡＩｂイ	N S	21.0		2.9		D, E, F, H	良好		灰	25	カマド
24	羽ＡⅡａロ	N S	22.3		2.6		B, E, H	良好		黒	20	カマド
25	羽ＡＩｂロ	H S	20.0		2.8		B, E, H	良好		明褐	20	
26	羽底部	H S				6.1	B, E, H	良好		外－褐。内－灰白	100	底部

第190図　第104号住居跡・出土遺物（1）



第191図　第104号住居跡出土遺物（2）



は、補強材の川原石を使用していた。焚き口部の前面から燃焼部にかけて、極めて浅い楕円形の窪みを検出した。燃焼部と煙道部の境に段はなかった。煙道部は、緩やかに傾斜し、煙り出し部で垂直に立ち上がっていた。煙道部からは、補強材の使用された羽釜（21）が出土した。

遺構の切り合い関係は、第292・293号土壙より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の高台付椀（20）・羽釜（22・23・24）が出土した。また住居跡の南東から須恵器の高台付椀（9・16）が、住居跡の北西から須恵器の坏（1）・高台付椀（4・5・7・12・14）、灰釉陶器の皿（18）がまとまって出土した。

1・2は、須恵器（HS）の椀である。3から16は、高台付椀である。3・9から12は、須恵器（NS）である。他は、須恵器（HS）である。17は、須恵器（HS）の椀である。8・13は口縁部、10・11・12は高台が欠損している。2は外面口縁部と底部・内面口縁部、6・7は内面体部、11は外面口縁部から体部にかけて、15は内面口縁部から体部にかけて、17は外面底部に黒色の付着物が確認できる。2・6・7・11・17は、油煙の痕跡と考えられる。15は、煤の痕跡と考えられる。

18は、灰釉陶器の高台付皿である。19は、高台付椀である。20は、須恵器（HS）の高脚高台付椀である。19は口縁部と底部、20は口縁部が欠損している。

21から26は、羽釜である。23・24は、須恵器（NS）である。他は、須恵器（HS）である。21は底部、22・24は胴部中位以下、23は胴部下位以下、25は胴部上位

以下が欠損している。26は、底部のみである。

27から29は、鉄製品である。27は鉄鏃、28・29は延板状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第104号竪穴式住居跡を中堀Ⅸ期に位置付けたい。

第105号住居跡（第192図）

K－9・10グリッドで確認した。三軒の住居跡が重複し、確認に手間取った。

住居跡の北半分は第108号住居跡が破壊したため、形状は不明であった。残存する南壁は、長さ3.45m・深さ0.30mであった。

主軸方位は、N－88°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。焚き口部の前面には、楕円形の極く浅い掘り込みがあった。燃焼部は、奥壁側がやや低くなっていた。

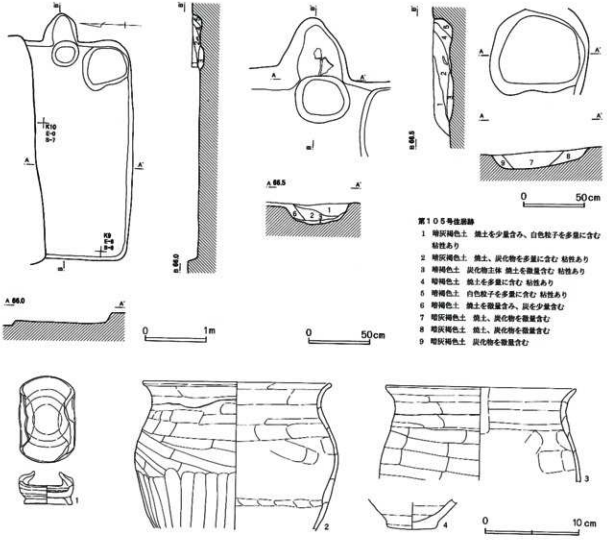
貯蔵穴は、カマド右脇の南東隅で検出した。形状は不整長方形であった。規模は、長径0.78m・短径0.62m・深さ0.13mであった。

遺構の切り合い関係は、第108号住居跡より古かった。

1は、須恵器（NS）である。

2から4は、土師器の甕である。2は胴部下位以下、3は胴部中位以下が欠損している。4は、底部のみである。

第192図　第105号住居跡・出土遺物



第159表　第105号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	輪轆	色　調	残存	出土位置その他
1	耳　皿	NS				5.0	D, F, K	不　良		暗　灰	90	貯穴
2	甕 A Ⅱ a	H	19.6				B, E	良　好		暗　赤　褐	25	カマド
3	甕 A Ⅲ c	H	20.0				B, E, H	良　好		淡　橙	20	カマド
4	甕　底　部	H				5.0	B, E	良　好		赤　褐	20	底部－100。貯穴

第160表　第106号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	輪轆	色　調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	NS	12.2				B, E, G	良　好		灰　黄	25	
2	高台付椀	HS	12.7				B, E	普　通		内－浅黄。 外－灰	20	
3	ロクロ甕	HS	13.9				B, E, H	良　好		外－褐灰。 内－黒	15	

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第105号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第106号住居跡（第193図・第194図）

K－9グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙・溝など密集し、重複も激しく確認に手間取った。

住居跡の大半は第109号住居跡で破壊されていたため、不明な点が多かった。残存する北壁は、長さ2.12ｍ・深さ0.41ｍであった。

推定される主軸方位は、N－91°－Eであった。

遺構の切り合い関係は、第109号住居跡より古かった。

1は、須恵器（NS）の高台付椀である。2は、須恵器（HS）の高台付椀である。1・2は、底部と高台が欠損している。

3は、須恵器（HS）の甕である。3は、胴部上位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第106号竪穴式住居跡を中堀Ⅸ期に位置付けたい。

第107号住居跡（第195図）

K－10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙など密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.41ｍ・短辺2.53ｍ・深さ0.26ｍであった。住居跡の北西隅から径0.6ｍ・深さ0.21ｍの円形の土壙を検出した。

主軸方位は、N－90°－Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して造られ、短く住居跡内に伸びていた。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

遺構の切り合い関係は、第290号土壙より古く、第108号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド右脇から須恵器の高台付椀（3・5）が重なって出土した。

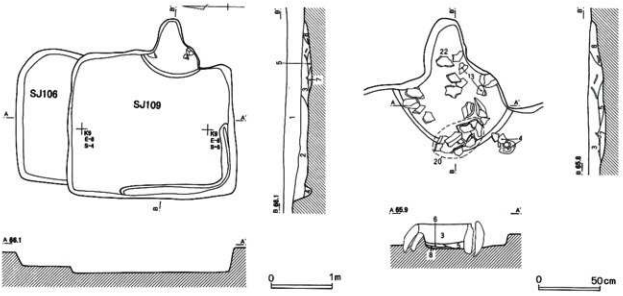
1・2は、須恵器（HS）の椀である。3から8は、高台付椀である。3・8が須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。1は底部、2・7は口縁部、6は高台、8は口縁部と高台が欠損している。

9は、土師器の甕である。10から12は、須恵器（HS）の羽釜である。9から12は、胴部上位以下が欠損している。

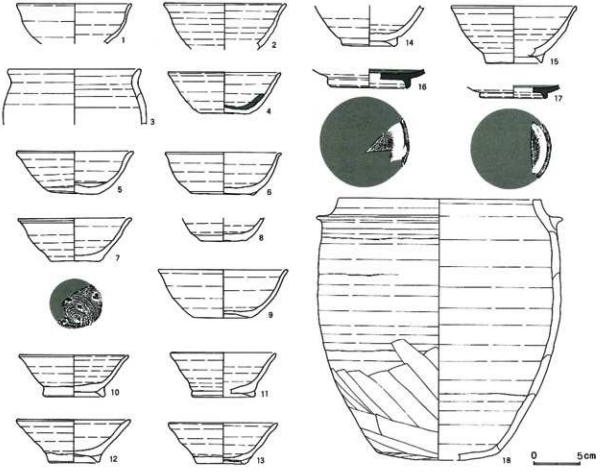
13から16は、鉄製品である。13は鎌、14・15は刀子、16は釘である。いずれも破片である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第107号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

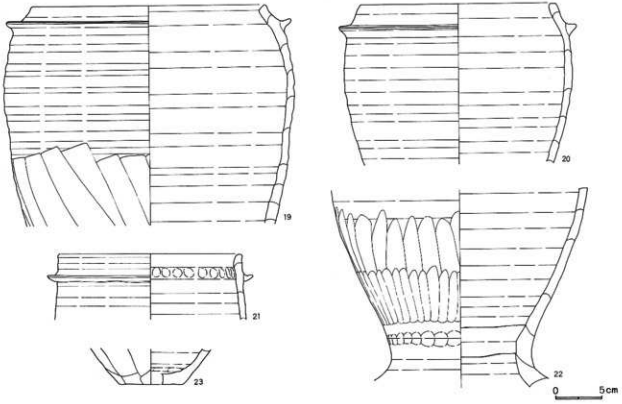
第193図　第106・109号住居跡・出土遺物（1）



第106・109号住居跡
1　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭化粒子を少量含む
2　黒褐色土　焼土粒子、炭化粒子を少量含む
3　黒褐色土　焼土粒子を多量に含み、炭化粒子を少量含む
4　暗褐色土　炭化粒子を微量含む
5　黒褐色土　焼土、焼土ブロック、炭化粒子を多量に含む
6　暗褐色土　焼土を少量含み、炭化粒子を微量含む
7　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を微量含む
8　黒褐色土　焼土粒子、焼土ブロックを多量に含み、炭化粒子を微量含む



第194図　第106・109号住居跡出土遺物（2）



第161表　第107号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸幅	色調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	11.3				B, E, H	良好	R	淡橙	30	
2	椀	HS				5.3	B, H, I	良好	R	淡橙	50	
3	高台付椀	NS	13.8	5.6		5.3	B, C, E, H, K	良好	R	灰白	40	
4	高台付椀	HS	12.2	5.2		5.3	A, B, C, E, H	良好	L	灰褐	80	
5	高台付椀	HS	11.8	4.8		5.9	B, E, I	普通	R	灰白	80	
6	高台付椀	HS	11.9				B, C, E	良好	R	灰	25	
7	高台付椀	HS				5.9	C, E, H	良好	R	淡黄橙	40	
8	高台付椀	NS					B, E, H	良好	R	灰	30	
9	甕 A Ⅳ b	H	18.6					良好		外－暗褐。内－淡橙	15	
10	羽 A Ⅱ b ロ	HS	20.5		3.0		B, C, D, I	良好		外－明赤褐、暗灰褐。内－灰、明赤褐	50	
11	羽 B Ⅱ a	HS	19.9		2.4		B, E, H	良好		灰白	20	
12	羽 B Ⅱ a	HS	22.0		3.2		B, E, H, K	良好		暗褐	15	

第108号住居跡（第196図・第197図）

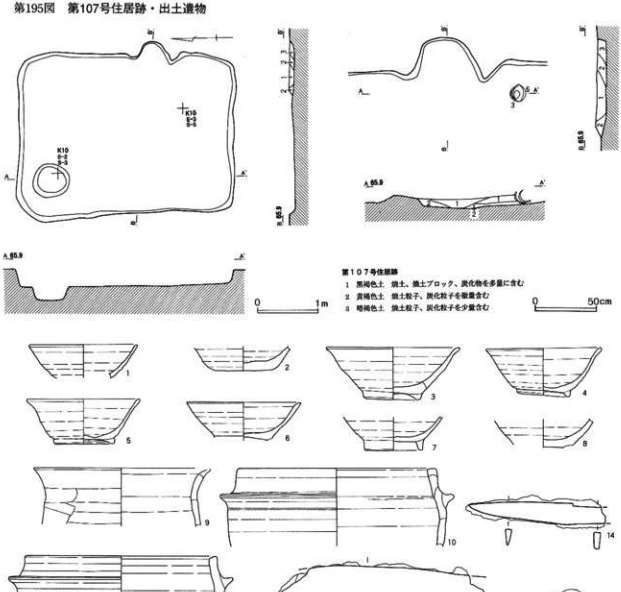
K－9・10グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙・溝など密集し、重複も激しく確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.55m・短辺2.30m・深さ0.42mであった。

主軸方位は、N－76°－Eであった。

カマドは、東壁の北東寄りに検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。焚き口部の両側に川原石が補強材として使用していたからである。燃焼部の掘り込みはみられず、燃焼部から煙道部へは、緩やかに傾斜しながら細長い煙道部に移行していた。煙道部は、段はもたなかった。

第195図　第107号住居跡・出土遺物

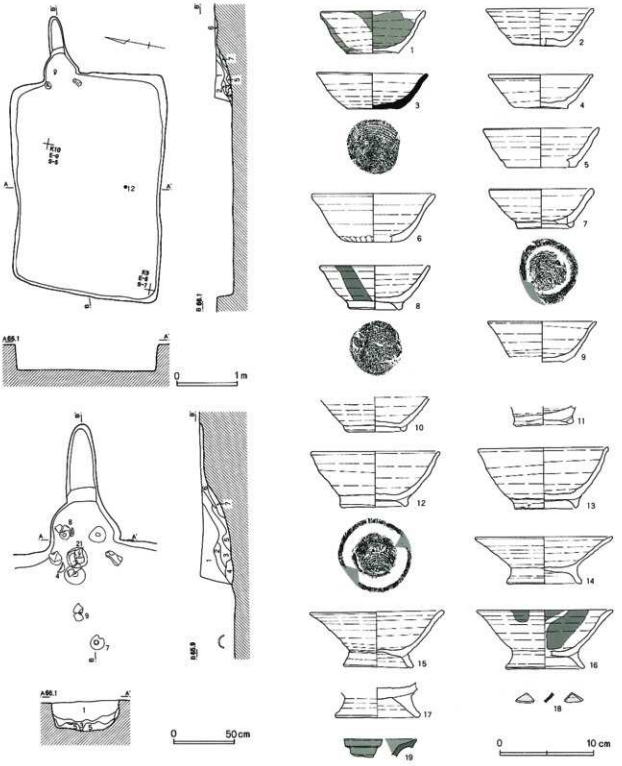


遺構の切り合い関係は、第107号住居跡より古く、第105・109号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の坏（4）・高台付椀（8）・羽釜（21）が出土した。カマド前面からも須恵器の高台付椀（7・9）が出土した。

1から6は、椀である。5は須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。7から13は、須恵器（HS）の高台付椀である。14から17は、高脚高台付椀である。14・16は須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。2・5・6・16は底部、9は高台、10は口縁部が欠損している。11・17は、底部のみである。1は外面口縁部から底部にかけてと内面口縁部、8は外面口縁部から底部にかけて、16は外面口縁部と内面口縁部から底部にかけて黒色の付着物が確認できる。1・16は油煙

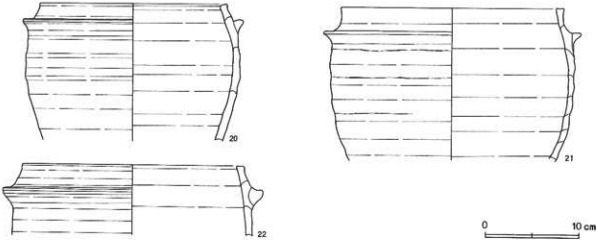
第196図　第108号住居跡・出土遺物（1）



第１０８号住居跡

1　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子、白色粒子を少量含む
2　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を微量含む
3　黒褐色土　焼土粒子、炭化粒子を少量含む
4　黒褐色土　焼土、焼土ブロック、炭化粒子を多量に含む
5　黒褐色土　焼土、焼土ブロック、炭化物を多量に含む
6　褐色土　焼土粒子、炭化粒子を少量含む
7　褐色土　焼土粒子を微量含む

第197図　第108号住居跡出土遺物（2）



の痕跡と考えられる。

18は、緑釉陶器の高台付椀である。18は、体部破片である。

19は、灰釉陶器の長頸壺である。19は、口縁部破片である。

20から22は、羽釜である。21・22は須恵器（ＮＳ）、23は須恵器（ＨＳ）である。20・21は胴部下位以下、22は胴部上位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第108号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第162表　第108号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	椀	ＨＳ	11.0	4.5		5.5	B, E, G, I	普通	R	灰黄	100	
2	椀	ＨＳ	11.4	4.0		5.4	B, E	普通	R	にぶい黄橙	40	
3	椀	ＨＳ	11.6	3.9		5.5	A, B, E, H, K	良好	R	灰白	100	
4	椀	ＨＳ	11.1	3.7		5.7	B, D, I	普通	R	にぶい黄橙	100	カマド
5	椀	ＮＳ	12.2	4.1		7.2	B, D, E	良好	R	灰	25	
6	椀	ＨＳ	13.0	5.0		5.4	C, D, E	良好	R	明赤褐	25	
7	高台付椀	ＨＳ	10.9	4.2		5.5	B, C, E	良好	L	明褐	90	カマド。穿孔
8	高台付椀	ＨＳ	11.6	4.7		5.0	B, E, H, K	良好	R	明褐	100	カマド
9	高台付椀	ＨＳ	11.5				B, E, I	普通	R	灰黄	95	
10	高台付椀	ＨＳ				5.9	A, B, C, E	良好	R	黒	100	
11	高台付椀	ＨＳ				5.8	C, E, G	良好	R	明褐	100	底部
12	高台付椀	ＨＳ	13.6	5.9		6.9	B, E, H	良好	R	外－浅黄橙。内－褐	80	
13	高台付椀	ＨＳ	13.6	6.4		6.4	B, E, I	普通	R	灰黄	80	
14	高脚高台付椀	ＨＳ	14.6	4.9		7.8	B, E	良好	R	外－灰褐。内－黒	70	
15	高脚高台付椀	ＮＳ	14.0	6.2		7.1	B, D, E	良好	L	明灰褐	70	カマド
16	高脚高台付椀	ＨＳ	14.4	6.2		8.2	C, D, E, I	良好	R	明赤褐	25	
17	高脚高台付椀	ＮＳ				8.7	B, D, E	良好	R	灰	80	
18	高台付皿	Ｍ					B	良好		オリーブ灰	2	
19	長頸壺	Ｋ					B	良好		暗灰	5	破片
20	羽ＡⅡａイ	ＮＳ	19.7		1.9		B, E	良好		灰白	20	
21	羽ＡＩｂａ	ＮＳ	23.6		2.9		B, D, I			外－灰。内－明褐	20	
22	羽ＢⅡａ	ＨＳ	23.4		2.7		B, D, I	良好		暗褐	25	

第109号住居跡（第193図・第194図）

K－9グリッドで確認した。周辺は、住居跡・土壙・溝など密集し、重複も激しく確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺2.65m・短辺2.33m・深さ0.40mであった。西壁から南壁にかけては、幅26cmの壁溝を検出した。

主軸方位は、N－95°－Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、当初から造られたかったと判断した。焚き口部の両側に扁平な川原石を二個ずつ並べ、補強材としていたからである。燃焼部は右側にやや膨らんでいた。焚き口部の前面から燃焼部にかけては、浅い掘り込みがみられた。燃焼部と煙道部の境の段はみられず、底面はほぼ水平であった。

遺構の切り合い関係は、第108号住居跡より古く、第106号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の高台付椀（13）・羽釜（20）・甑（22）が出土した。

4から9は、椀である。5・7が、須恵器（NS）である。他は、須恵器（HS）である。10から15までは、須恵器（HS）の高台付椀である。8・14は口縁部、11・15は底部が欠損している。4は、内面底部に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

16・17は、灰釉陶器の高台付皿である。16・17は底部破片である。

18から22は、羽釜である。22は須恵器（HS）、ほかは須恵器（NS）である。23は、須恵器（HS）の甑である。18は底部、19・20は胴部下位以下、21は胴部上位以下が欠損している。22は胴体部のみ、23は底部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第109号竪穴式住居跡を中堀K期に位置付けたい。

第110号住居跡（第198図）

K・L－10グリッドで確認した。周辺の遺構は、比較的疎らであったが、住居跡の覆土と遺構構築面の色調が近似していたため、第16号区画溝の覆土除去中にカマドの燃焼部を確認したことで明らかとなった。

第163表　第109号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸輪	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	NS	11.9				B, E	普通	R	灰白	20	
2	高台付椀	HS	12.7				B, D, E	普通	R	黄灰	30	
3												
4	椀	HS	11.8	4.4		5.3	B, E, I	普通	R	にぶい橙	90	カマド
5	椀	NS	12.3	4.5		5.2	B, C, D, G	良好	R	黒褐	90	
6	椀	HS	12.2				B, E, G	良好	R	明黄褐	15	底部－25
7	椀	NS	12.0	4.6		5.3	B, E, G, I	良好	R	黒褐	50	
8	椀	HS				4.9	C, D, E	良好	R	明褐	100	底のみ
9	椀	HS	13.6	5.1		6.1	B, E	普通	L	淡黄	20	
10	高台付椀	HS	11.6	4.4		6.1	B, C, E	良好	R	淡橙	25	
11	高台付椀	HS	11.0	4.6		6.4	A, B, D	良好	R	灰白	25	
12	高台付椀	HS	12.0	4.6		5.0	B, C, D, E	良好	R	黒。口縁上部内外面－暗黄褐	40	
13	高台付椀	HS	11.4	4.4		4.9	B, E, I	良好	R	にぶい橙	60	カマド
14	高台付椀	HS				5.3	B, D, G, K	良好	R	明褐	100	底部
15	高台付椀	HS	13.2	6.1		5.9	A, B, D, E	良好	R	灰	20	
16	高台付皿	K				8.0	B, D	良好		淡灰	10	
17	高台付皿	K				6.6	B, D	良好		灰	10	
18	羽AⅠbロ	HS	21.7	27.8	2.2	12.0	A, B, D, I			外－黒褐。内－明褐	40	
19	羽AⅠaロ	HS	25.0		1.7		B, D, E, G, I, K	良好		明褐	20	
20	羽AⅠaロ	HS	21.4		2.5		A, B, D, G, I	良好		明赤褐	60	カマド
21	羽BⅡbイ	HS	19.0		2.4		B, C, E, H	良好		淡橙	15	
22	羽底部	NS				6.8	B, C, E	良好		灰	50	
23	甑	HS					A, B, D, I	良好		外－明褐。内－灰褐	30	カマド

住居跡の形状は、不整長方形であった。規模は、長辺3.14m・短辺2.04m・深さ0.32mであった。住居跡の中央に長径0.92m・深さ0.08mと長径0.58m・深さ0.07mの楕円形の並んだ二基の土壙を検出した。

主軸方位は、N－85°－Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。第16号区画溝の調査時に大半を破壊してしまい、不明な点が多かった。

遺構の切り合い関係は、第16号区画溝より新しかった。

1は、須恵器（NS）の羽釜である。1は、胴部中位以下が欠損している。

2は、須恵器（S）の甕である。2は、底部破片である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第110号竪穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第111号住居跡（第199図）

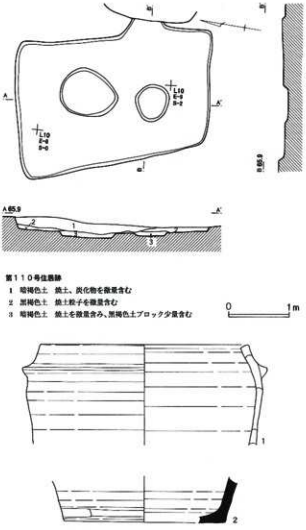
L－8グリッドで確認した。周辺は、住居跡・溝・小穴などの遺構が比較的密集していたが、覆土上面の火山灰をもとに確認できた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.24m・短辺2.25m・深さ0.35mであった。幅15cmの壁溝を、カマド部分を除き検出した。

主軸方位は、N－90°－Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。煙道部の位置から燃焼部全体が住居跡内に造られたと推定される。袖は、検出できなかったが、燃焼部を覆うように造り付けられていたと推定した。燃焼部から煙道部へは、段をもたずに移行し、煙り出し部に向かって煙道部が緩やかに傾斜していた。カマド周辺からは、カマド構築材の大形の川原石が出土した。

第198図　第110号住居跡・出土遺物



遺構の切り合い関係は、第16号区画溝より新しかった。

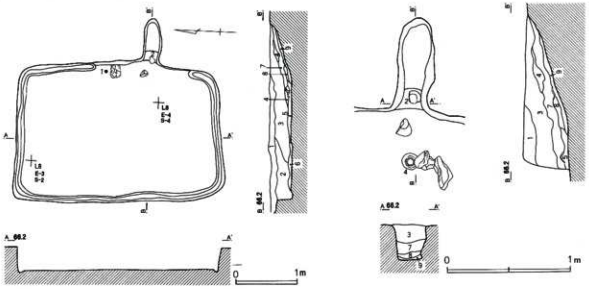
遺物は、カマド内から須恵器の高台付椀（2・4）が出土し、カマド左側から土師器坏（1）が出土した。

1は、土師器の坏Cである。2から7は、高台付椀である。2・6・7は、須恵器（NS）である。ほかは、須恵器（HS）である。8は、須恵器（NS）の

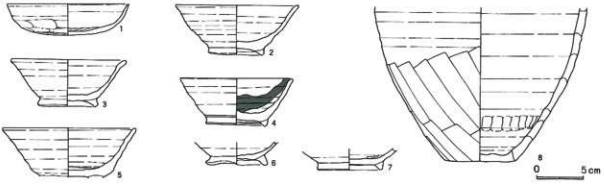
第164表　第110号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	釉薬	色調	残存	出土位置その他
1	羽ＡＩａイ	ＮＳ	21.6		2.5		A.B.E.H	良好		灰白	15	
2	甕	S				16.9	B	良好		灰	20	

第199図　第111号住居跡・出土遺物



第111号住居跡
1　褐色土　焼土を微量含み、Ⅱ軽石を多量に含む
2　褐色土　焼土、炭化物を少量含む
3　褐色土　焼土ブロックを多量に含み、炭化物を少量含む
4　暗褐色土　焼土を少量含み、炭化粒子を微量含む
5　褐色土　焼土粒子を微量含む　粘性あり
6　黒褐色土　焼土粒子を少量含む
7　暗褐色土　焼土、焼土粒子を多量に含み、炭化粒子を少量含む
8　黒褐色土　焼土ブロックを多量含み、炭化物を微量含む
9　黒褐色土　焼土粒子、炭化粒子を微量含む



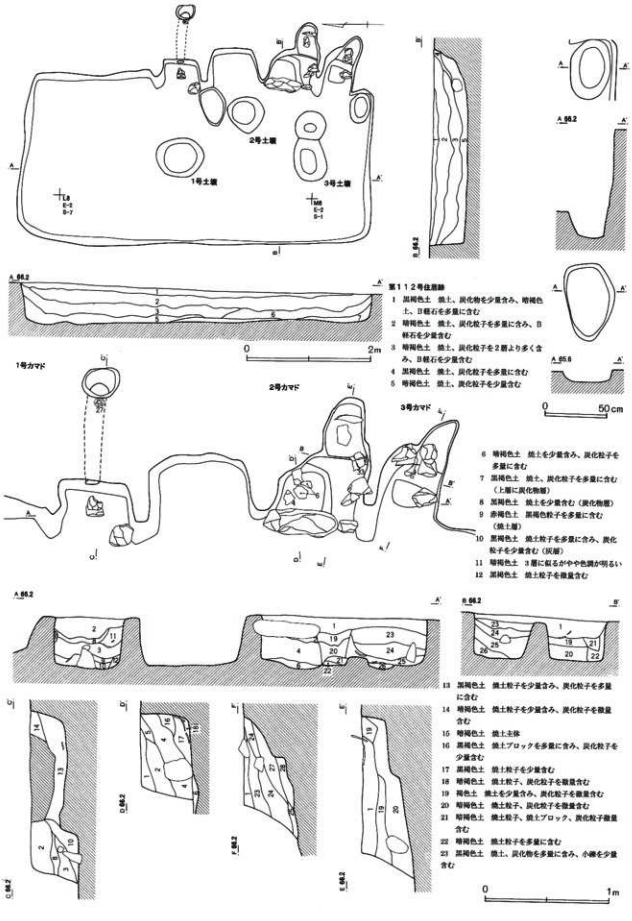
第165表　第111号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸線	色調	残存	出土位置その他
1	坏C	H	12.8	3.4		7.8	B, D, E	不良		白橙	80	
2	高台付椀	NS	12.8	5.3		5.1	B, D, E, G, I	良好	R	灰褐	100	
3	高台付椀	HS	12.1	5.0		5.6	B, E, I	良好	R	灰黄	50	
4	高台付椀	HS	11.6	4.9		6.1	B, C, D, E, G, I	良好	L	明褐	100	
5	高台付椀	HS	13.9				B, E	良好	R	橙	70	
6	高台付椀	HS				6.0	B, E, H, I	良好	R	明赤褐	100	底部
7	高台付椀	NS				6.8	B, E, H	良好	R	灰白	100	底部
8	羽釜底部	NS				7.3	B, D, K			灰褐	40	

羽釜である。5は高台、6・7は口縁部が欠損している。8は、底部のみである。4は、内面口縁部から底部にかけて黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第111号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第200図　第112号住居跡

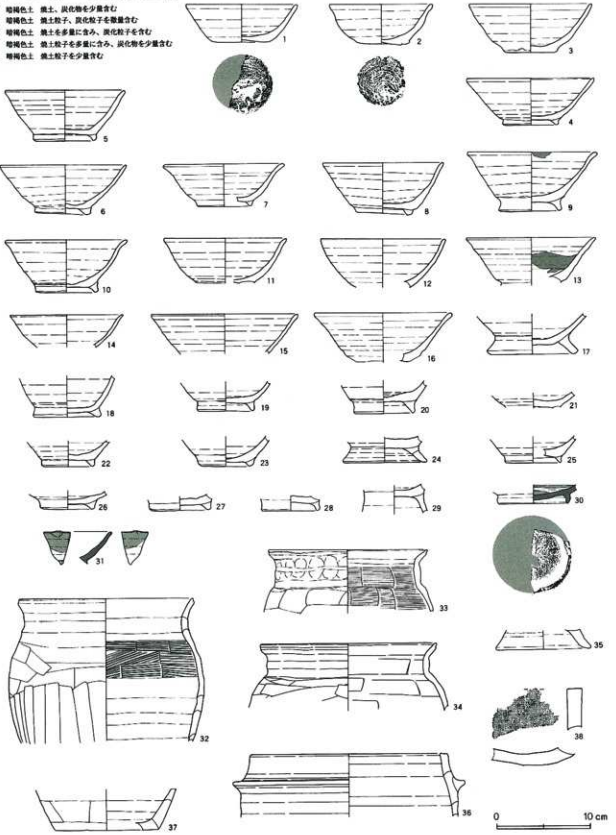


第112号住居跡

1 黒褐色土　焼土、炭化物を少量含み、暗褐色土、B軽石を多量に含む
2 暗褐色土　焼土、炭化粒子を多量に含み、B軽石を少量含む
3 暗褐色土　焼土、炭化粒子を2層より多く含み、B軽石を少量含む
4 黒褐色土　焼土、炭化粒子を多量に含む
5 暗褐色土　焼土、炭化粒子を少量含む
6 暗褐色土　焼土を少量含み、炭化粒子を多量に含む
7 黒褐色土　焼土、炭化粒子を多量に含む（上層に炭化物層）
8 黒褐色土　焼土を少量含む（炭化物層）
9 赤褐色土　黒褐色粒子を多量に含む（焼土層）
10 黒褐色土　焼土粒子を多量に含み、炭化粒子を少量含む（灰層）
11 暗褐色土　3層に似るがやや色調が明るい
12 黒褐色土　焼土粒子を微量含む
13 黒褐色土　焼土粒子を少量含み、炭化粒子を多量に含む
14 暗褐色土　焼土粒子を少量含み、炭化粒子を微量含む
15 暗褐色土　焼土主体
16 黒褐色土　焼土ブロックを多量に含み、炭化粒子を少量含む
17 黒褐色土　焼土粒子を少量含む
18 暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を微量含む
19 褐色土　焼土を少量含み、炭化粒子を微量含む
20 暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を微量含む
21 暗褐色土　焼土粒子、焼土ブロック、炭化粒子微量含む
22 暗褐色土　焼土粒子を多量に含む
23 黒褐色土　焼土、炭化物を多量に含み、小礫を少量含む

第201図　第112号住居跡出土遺物

24　暗褐色土　焼土、炭化物を少量含む
25　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を微量含む
26　暗褐色土　焼土を多量に含み、炭化粒子を含む
27　暗褐色土　焼土粒子を多量に含み、炭化物を少量含む
28　暗褐色土　焼土粒子を少量含む



第112号住居跡（第200図・第201図）

L・M－8グリッドで確認した。周辺は、住居跡・溝などがみられたが、比較的疎らであった。当初は三基のカマドを確認したことから、重複関係を想定したが、断面観察から同一住居跡のカマドと判断した。

住居跡の形状は、南北に細長い長方形であった。規模は、長辺5.54m・短辺2.76m・深さ0.57mであった。住居跡内からは、三基の土壙を検出した。1号土壙は、径0.75m・深さ0.12m、2号土壙は径0.55m・深さ0.15m、いずれも円形であった。3号土壙は、不整楕円形で規模は、長径1.08m・深さ0.05mであった。

主軸方位は、N－95°－Eであった。

カマドは、東壁の中央から南東隅にかけて、三基並んで検出した。覆土の堆積状況から、3基とも住居の埋没前まで併用していたと推定した。

1号カマドは、東壁の中央に造られていた。袖は、地山を掘り残して造り、短く住居跡内に伸びていた。燃焼部は整った方形で、底面の掘り込みはみられなかった。燃焼部の中央から川原石を使用した支脚を検出したことから、一つ掛けのカマドと判断した。燃焼部から煙道部へは、段をもって移行していた。煙道部は、長さ0.97mと細長く、地山を掘り抜いて造られていた。煙道部の底面は、小さな凹凸がみられたが、ほぼ水平に伸びていた。煙り出し部は小穴状で、煙道部から急傾斜に立ち上がっていた。

2号カマドは、南東寄りに造られていた。左袖は、地山を掘り残して造られたが、3号カマドと共有する右袖は、地山を低く掘り残した上に暗褐色土を補充して造られていた。右袖の先端には、補強材の川原石が使用され、焚き口部の天井にも大形の川原石が補強材として使用され、鳥居状に組くまれていた。燃焼部は不整形であった。浅い火床面の掘り込みが、左側半分に検出できた。燃焼部から煙道部に向かっては、緩やかに傾斜し、小さな段をもって煙道部に移行していた。煙道部は、燃焼部右奥から短く伸び、煙り出し部は、垂直に立ち上がっていた。

3号カマドは、2号カマドと並んで造られていた。軸が南に振れ、住居跡の中央方向に焚き口部が向いていた。左袖は、2号カマドと共有するが、右袖は検出されなかった。燃焼部の掘り込みは小さく浅かった。煙道部には、小さな段をもって移行していた。燃焼部内からカマドの構築材の川原石が出土していた。長さ0.44mの煙道部は、緩やかに傾斜しながら、垂直に立ち上がり、煙り出し部へと移行していた。

貯蔵穴は、1号カマドの右袖前面と、3号カマドの右脇南東隅から二基検出した。1号カマドの脇の貯蔵穴は、不整楕円形で、長径0.65m・深さ0.07mであった。3号カマド右脇の貯蔵穴は、楕円形で長径0.47m・深さ0.25mであった。

遺構の切り合い関係は、古墳時代前期の第1号溝より新しかった。

遺物は、2号カマド内から須恵器の高台付椀（4・6）・土師器の甕（33）が出土した。

1から3は、須恵器（HS）の椀である。4から29は、高台付椀である。5・7・8・12・15・16・17・20は、須恵器（NS）である。他は、須恵器（HS）である。7は底部、11から16は底部と高台、17から20・22・23は口縁部が欠損している。24から29は、底部のみである。9は内面口縁部、13は内面体部に黒色の付着物が確認できる。9は油煙、13は煤の痕跡と考えられる。

30は、灰釉陶器の高台付皿である。31は、高台付輪花椀である。30は底部のみ、31は口縁部破片である。

32から34は、土師器の甕である。36・37は、須恵器（HS）の羽釜である。32は胴部下位以下、33・34・36は胴部上位以下が欠損している。37は、底部のみである。

38は、平瓦である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第112号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第113号住居跡（第202図）

L－8グリッドで確認した。周辺は、住居跡・溝・小穴などの遺構が比較的密集していたが、覆土上面の火山灰をもとに確認した。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺2.68m・短辺2.23m・深さ0.45mであった。西壁に幅20cmの壁溝を検出した。

主軸方位は、N－93°－Eであった。

カマドは、東壁の中央で検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。焚き口部の前面から燃焼部にかけて、浅い掘り込みがみられた。燃焼部の中央から川原石の支脚が出土したことから、一つ掛けのカマドと推定される。燃焼部から煙道部へは、大きな段

第166表　第112号住居跡出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
38	平瓦	還元炎	刷り消し	布	－

第167表　第112号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	輻輻	色調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	11.8	4.0		6.2	B, E, I	普通	R	灰黄	40	
2	椀	HS	10.8	4.3		5.6	B, C, D, E, I	良好	R	外－黒褐と灰褐がまだら。内－黒褐	90	
3	椀	HS	12.8	5.2		5.1	B, I	普通	R	黄灰	40	
4	高台付椀	HS	13.4	4.9		5.3	B, E, I	普通	L	にぶい黄橙	50	
5	高台付椀	NS	12.7	5.4		6.1	B, D, E, G	良好	R	灰褐		底部－100，口縁－20
6	高台付椀	HS	13.3	5.2		5.0	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	50	
7	高台付椀	NS	12.1	4.5		5.5	A, B, E	良好	R	灰	25	
8	高台付椀	NS	12.8	5.5		5.2	B, E	良好	L	灰白	75	
9	高台付椀	HS	13.6	6.3		6.1	B, E, I	普通	R	浅黄	90	
10	高台付椀	HS	12.6	5.6		5.8	B, C, E, I	普通	R	にぶい黄橙	60	
11	高台付椀	HS	12.9				B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	40	
12	高台付椀	NS	13.1				B, D, E	良好	R	明灰褐	25	
13	高台付椀	HS	13.4				B, D, E	良好	L	淡黄褐	25	
14	高台付椀	HS	11.9				E, I	普通	R	にぶい橙	40	
15	高台付椀	NS	15.5				B, E, G, K	良好	R	黒褐	25	
16	高台付椀	NS	14.4				A, B, E	良好	L	黒	25	
17	高台付椀	NS				8.9	B, D, E, G	良好	R	黒	40	
18	高台付椀	HS				6.9	B, E, I	普通	R	浅黄橙	20	
19	高台付椀	HS				5.8	A, C, E, I	良好	R	外－明褐。内－黒	100	1号カマド
20	高台付椀	NS				6.0	E, I	普通	L	灰オリーブ	30	
21	高台付椀	HS					B, I	普通	L	浅黄	20	
22	高台付椀	HS				5.0	B, E, I	普通	R	橙	10	
23	高台付椀	HS				5.1	B, E, I, K	良好	L	明褐	50	
24	高台付椀	HS				8.6	A, B, E	良好	R	灰褐	80	
25	高台付椀	HS				5.8	B, C, E	良好	R	明褐	40	
26	高台付椀	HS				4.9	B, E, I	良好	L	灰黄	20	
27	高台付椀	NS				5.7	B, E, I	良好	R	褐灰	20	1号カマド
28	高台付椀	黒色				5.9	B, C, E, I	良好	R	外－明赤褐。内－黒	100	
29	高台付椀	HS					B, E, I	普通	L	灰白	10	
30	高台付皿	K				7.4	B	良好		淡灰	20	底部のみ
31	高台付輪花椀	K					B, D	良好		淡灰	10	破片
32	甕ＡⅢｂ	H	18.5				B, D, E	良好		明褐	60	
33	甕ＢⅢａ	H	16.9				B, E	普通		橙	10	2号カマド
34	甕ＢⅢｂ	H	18.6				B, E	普通		暗橙	10	口縁のみ
35	高台付椀	HS				9.9	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	50	
36	羽ＡⅠａロ	HS	20.8		3.0		B, D, E, I	良好		明赤褐	25	
37	羽底部	HS				11.0	B, C, E, G	良好		灰	20	

をもって移行していた。煙道部には補強材として羽釜（5）と甑（6）が使用されていた。

遺構の切り合い関係は、第114号住居跡・第16号区画溝より新しかった。

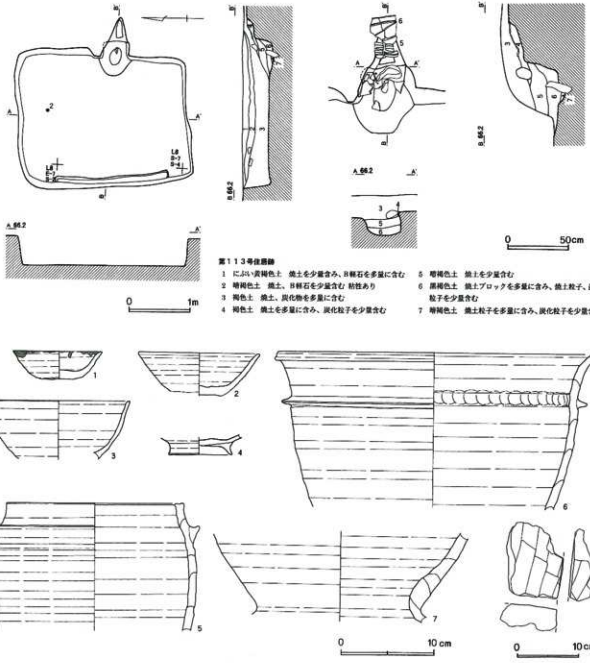
1は、須恵器（HS）の椀である。2から4は、高台付椀である。2・4は、須恵器（NS）である。他は、須恵器（HS）である。2は高台、3は底部と高台、4は口縁部が欠損している。1は、口縁部に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

5は、須恵器（HS）の羽釜である。6・7は、甑である。5・6は、胴部中位以下が欠損している。7は、胴体部のみである。

8は、凝灰岩である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第113号竪穴式住居跡を中期Ⅲ期に位置付けたい。

第202図　第113号住居跡・出土遺物



第113号住居跡

1 にぶい黄褐色土　焼土を少量含み、B軽石を多量に含む
2 暗褐色土　焼土、B軽石を少量含む 粘性あり
3 褐色土　焼土、炭化物を多量に含む
4 褐色土　焼土を多量に含み、炭化粒子を少量含む
5 暗褐色土　焼土を少量含む
6 黒褐色土　焼土ブロックを多量に含み、焼土粒子、炭化粒子を少量含む
7 暗褐色土　焼土粒子を多量に含み、炭化粒子を少量含む

第168表　第113号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	9.3	3.0		3.6	F, I	良　好	R	濃　橙	90	油煙付
2	高台付椀	NS	12.6			6.7	A, B, E, G, H	良　好	R	黒　灰	80	
3	高台付椀	HS	15.1				B, C, E	良　好	R	淡　黄　褐	20	
4	高台付椀	NS					B, E, H	良　好	R	灰　白	70	
5	羽AⅠb口	HS	18.6		2.5		A, C	良　好		明　赤　褐	50	
6	瓶　A　I	HS	33.3		5.2		A, B, C, D, E	良　好		淡　赤　褐	15	
7	瓶	NS					A, B, I	良　好		外－灰褐。 内－明灰褐	80	

第114号住居跡（第203図）

L－8・9グリッドで確認した。周辺は、住居跡・溝・小穴などの遺構が比較的密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.55m・短辺3.10m・深さ0.54mであった。

主軸方位は、N－90°－Eと推定した。

カマドは、第115号住居跡によって破壊されていたため、不明であった。

遺構の切り合い関係は、第113・115号住居跡より古かった。

1は、土師器の坏AⅤである。1は、底部が欠損している。

2は、須恵器（NS）の椀である。2は、口縁部と底部が欠損している。

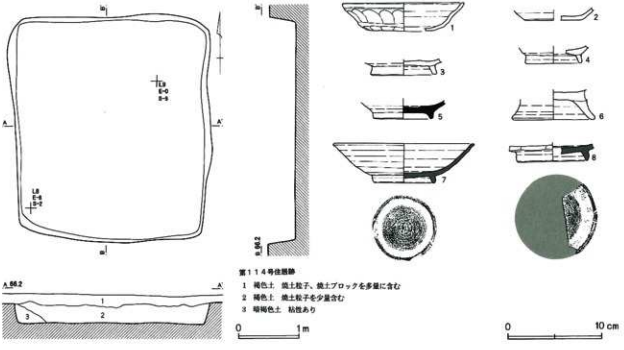
3から5は、高台付椀である。3は須恵器（S）、4・5は、須恵器（HS）である。3から5は、底部のみである。

6は、須恵器（HS）の高脚高台付椀である。6は底部のみである。

7・8は、灰釉陶器の高台付椀である。8は、転用硯である。8は、底部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第114号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第203図　第114号住居跡・出土遺物



第114号住居跡
1　褐色土　焼土粒子、焼土ブロックを多量に含む
2　褐色土　焼土粒子を少量含む
3　暗褐色土　粘性あり

第115号住居跡（第204図）

L・M－8グリッドで確認した。周辺は、住居跡・溝・小穴などの遺構が比較的密集していたが、覆土上面に堆積した火山灰をもとに確認した。

住居跡の形状は、不整長方形であった。規模は、長辺2.80m・短辺2.33m・深さ0.43であった。南壁を除き、幅20cmの壁溝を検出した。住居跡の中央北寄りから長径0.88m・短径0.51m・深さ0.05mの楕円形の土壙を、また、住居跡の南西部から径0.59m・深さ0.08mの円形の土壙を検出した。

主軸方位は、N－100°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、当初から造られなかったと判断した。燃焼部は、奥に向かって低く緩やかに傾斜していたが、掘り込みはみられなかった。燃焼部から煙道部には、大きく段をもって移行していた。煙道部は細長く、煙り出し部に向かって緩やかに傾斜していた。

貯蔵穴は、カマドの右脇南東部で検出した。形状は、楕円形であった。規模は、長径0.82m・短径0.43m・深さ0.09mであった。

遺構の切り合い関係は、第114号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内から羽釜（3・4）が出土した。

1は、須恵器（NS）の高台付椀である。1は、口縁部が欠損している。

2は、灰釉陶器の高台付椀である。2は、底部のみである。

3から5は、羽釜である。3・4は、須恵器（HS）、5は、須恵器（NS）である。3は底部、4は胴部上位以下、5は胴部中位以下が欠損している。

6は、石製腰帯具（石帯）の丸銙である。黒色の粘板岩製である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第115号竪穴式住居跡を中期Ⅶ期に位置付けたい。

第116号住居跡（第205図）

L－9グリッドで確認した。周辺の遺構は、比較的疎らであった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺2.91m・短辺2.33m・深さ0.10mであった。

主軸方位は、N－98°－Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。袖は、当初か

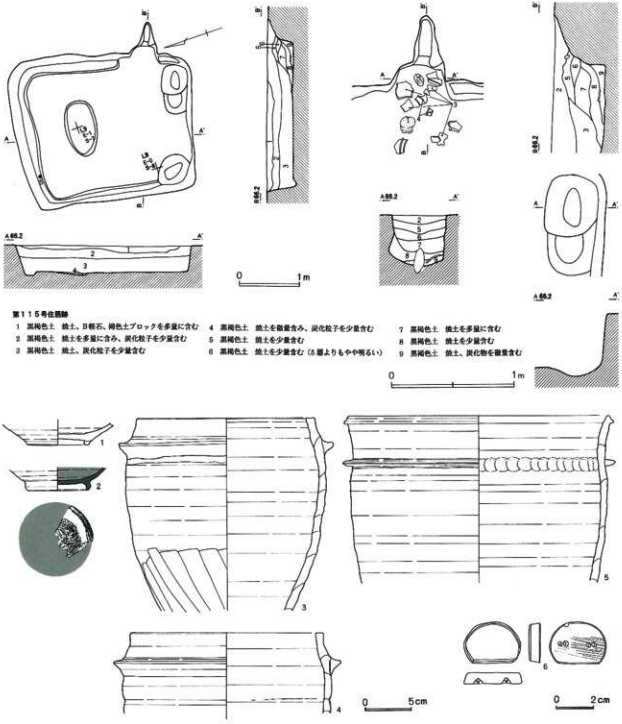
第169表　第114号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸幅	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A V	H	12.9	3.0		6.5	B, E, F	普通		暗黄土	30	
2	椀	NS				5.7	B, E, I	普通	R	灰白	10	
3	高台付椀	S				6.7	B	良好	R	灰	10	
4	高台付椀	NS				5.7	B, I	普通	L	灰	5	
5	高台付椀	NS				6.0	B, I	普通	R	灰白	10	
6	高脚高台付椀	HS				8.4	A, B, C, E	良好	R	明褐	60	
7	高台付椀	K	14.7	5.1		6.3	B	良好		淡灰褐	40	
8	高台付椀	K				7.4	B, D	良好		灰	50	転用硯

第170表　第115号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸幅	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS				6.3	B, D, I	良好	R	外－淡黄褐。内－灰	60	
2	高台付椀	K				6.3	B, D	良好		灰	10	
3	羽AⅡaイ	HS	18.9		2.8		B, C, D, E, G, I			明赤褐	30	
4	羽AⅠaロ	HS	20.4		3.1		A, B, D, G, I	良好		明褐	20	
5	甑 A I	NS	27.4		5.0		B, C, D, F, G, I	良好		外－灰褐。内－淡黄褐	20	

第204図　第115号住居跡・出土遺物



ら造られなかったと判断した。燃焼部は、不整楕円形に浅く掘り込まれていた。

貯蔵穴は、カマドの右側の南東部で検出した。形状は円形で、径0.4m・深さ0.12mであった。貯蔵穴を囲むように、大形の川原石がまとまって出土した。

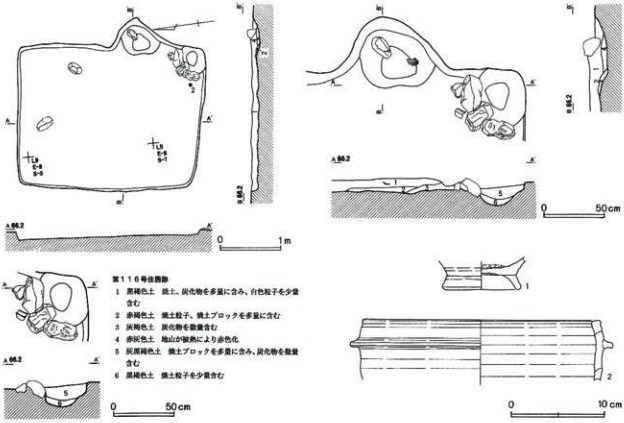
遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、貯蔵穴西脇から羽釜（2）が出土した。

1は、須恵器（HS）の高台付椀である。1は、口縁部が欠損している。

2は、須恵器（HS）の羽釜である。2は、胴部上

第205図　第116号住居跡・出土遺物



位以下が欠損している。

以上、出土遺物から第116号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第117号住居跡（第206図）

L・M－9グリッドで確認した。周辺の遺構は、比較的疎らであった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.11m・短辺2.78m・深さ0.30mであった。住居跡の西側の南壁よりから長径0.61m・深さ0.22mと長径0.29m・深さ0.05mの小穴二基を並んで検出した。

主軸方位は、N－95°－Eであった。

カマドは、東壁の南東隅よりに検出した。左袖は、地山を掘り残して造り、右袖は、住居跡の壁を利用していた「片袖型」カマドであった。燃焼部には、小さな凹凸がみられたが、掘り込みはみられなかった。燃焼部から煙道部にかけて緩やかな段をもって移行していた。煙道部は、煙り出し部に向かって傾斜し、天井は、扁平な川原石が、構築材として使用されていた。煙り出し部の底面は、水平で急傾斜で立ち上がっていた。

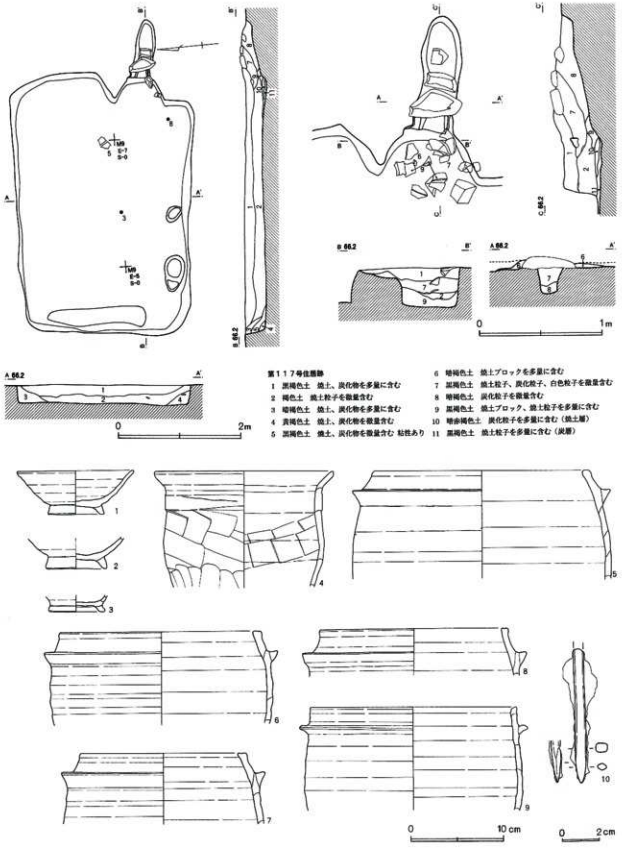
遺構の切り合い関係は、第17号区画溝より新しかった。

遺物は、カマド内から羽釜（6・7・9）が出土し、

第171表　第116号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS				7.8	B, C, E, H	良好	R	外－浅黄橙。内－黒	40	
2	羽BⅡa	HS	25.0		2.7		B, C, E, H	良好		明褐	15	

第206図　第117号住居跡・出土遺物



第117号住居跡

1　黒褐色土　焼土、炭化物を多量に含む
2　褐色土　焼土粒子を微量含む
3　暗褐色土　焼土、炭化物を多量に含む
4　黄褐色土　焼土、炭化物を微量含む
5　黒褐色土　焼土、炭化物を微量含む　粘性あり
6　暗褐色土　焼土ブロックを多量に含む
7　黒褐色土　焼土粒子、炭化粒子、白色粒子を微量含む
8　暗褐色土　炭化粒子を微量含む
9　黒褐色土　焼土ブロック、焼土粒子を多量に含む
10　暗赤褐色土　炭化粒子を多量に含む（焼土層）
11　黒褐色土　焼土粒子を多量に含む（炭層）

カマドの周辺から羽釜（5・8）が出土した。

1から3は、須恵器（NS）の高台付椀である。2・3は、口縁部が欠損している。

4は、土師器の甕である。4は、胴部下位以下が欠損している。

5から9は、須恵器（HS）の羽釜である。5・6・9は胴部中位以下、7・8は胴部上位以下が欠損している。

10は、錐と思われる鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第117号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第118号住居跡（第207図・第208図）

M－9・10グリッドで確認した。周辺の遺構は比較的疎らであった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.40m・短辺3.29m・深さ0.32mであった。南壁を除き、幅約23cmの壁溝を検出した。住居跡の南西隅に、径0.51m・深さ0.08mの土壙を検出した。

主軸方位は、N－105°－Eであった。

カマドは、東壁南寄りに検出した。袖は当初から造られなかったと判断した。燃焼部の右側は楕円形に浅く掘り込まれ、奥に向かって低く傾斜していた。燃焼部から煙道部には、緩やかな段をもって移行していた。

貯蔵穴は、カマドの右側の南東隅で検出した。形状は、不整楕円形であった。規模は、長径1.41m・短径1.09m・深さ0.09mであった。

遺構の切り合い関係は、第17号区画溝より新しかった。

遺物は、カマド内から須恵器の高台付椀（8）・土師器の甕（20）が出土し、貯蔵穴内から須恵器の高台付椀（4・10）・甑（22）が出土した。また、住居跡の北西隅から須恵器の高台付椀（5・13）・灰釉陶器の高台付椀（15）がまとまって出土した。なお、灰釉陶器の高台付椀（15）は、カマド左脇から出土した破片と接合した。

1は、須恵器（NS）の椀である。1は、底部が欠損している。

2から14は、高台付椀である。2・4・6・8・9・11・12・14は、須恵器（HS）である。他は、須恵器（NS）である。2・3・7は高台、4・9は底部と高台、10・12から14は口縁部、11は口縁部と底部が欠損している。

15から18は、灰釉陶器である。15・16は、高台付椀である。17・18は、高台付皿である。16は底部と高台、18は底部が欠損している。

19から21は、土師器の甕である。22は、土師器の甑である。19は胴部上位以下、20・21は胴部中位以下が欠損している。

23は、鉄製の紡錘車である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第118号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第172表　第117号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸薬	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	NS	12.2	4.6		5.3	B, D, E	良　好	L	灰	40	
2	高台付椀	NS NS				6.1	B, D, G, I	良　好	L	灰	100	底部
3	高台付椀	NS NS				5.8	B, C, D, G, I	良　好	R	明赤褐	100	底部
4	甕BⅣc	H	18.9				B, D, E, H	良　好		外－褐。内－淡橙	20	
5	羽　B　I	HS	22.9		2.1		A, B, D, E, I	良　好		明褐	20	
6	羽AⅠbロ	HS	21.4		2.2		A, B, C, D, G, I	良　好		灰白。内面－明褐	20	カマド
7	羽AⅡaロ	HS	17.6		2.1		B, C, D, E, F, G, I	良　好		明赤褐	20	カマド
8	羽AⅠaロ	HS	20.0		2.6		B, C, D, E, I	良　好		明褐	15	
9	羽BⅡbイ	HS	21.8		2.2		B, C, E, H	良　好		淡橙	30	カマド